

市内遺跡発掘調査事業報告書 第12集

小部遺跡Ⅱ

- 第19次調査報告書 -



2020

大分県宇佐市教育委員会

序 文

本書は、宇佐市教育委員会による小部遺跡第 19 次調査の報告書です。

小部遺跡は昭和 40 年代に吉備地方の土器に類似した完全な甕形土器 1 点が掘り出されたことを契機に注目されるようになりました。その後 18 次の調査を実施し、全長 200 m を超す環濠の内部に方形区画を伴う、古墳時代前期前半のいわゆる豪族居館である可能性が考えられるようになりました。

今年度調査では、方形区画の内側から大型掘立柱建物跡が発見され、豪族居館の中心的な建物跡の存在が明らかとなりました。全国的に非常に貴重な発見であり、小部遺跡は多くの方々の注目を集める遺跡となりました。

本書をはじめとする発掘調査報告書が学術研究のみならず、郷土の歴史や文化を知る上での手引書となり、さらに開発と文化財保護のあり方についての理解を深めることに役立つものとなるよう願っています。

最後に発掘調査から報告書の作成までご指導・ご協力いただきました諸先生をはじめ、関係者各位並びに関係機関に対し深く敬意を表するとともに、厚く御礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

宇佐市教育委員会

教育長 竹 内 新

例 言

- 1 本書は、宇佐市教育委員会が国庫・県費の補助を得て平成 31 年度(令和元年度)に実施した小部遺跡に関する調査報告書である。
- 2 調査を実施した遺跡は第 1 図に示した遺跡である。
- 3 遺構記号については、『発掘調査のてびき』(文化庁文化財部記念物課 2010)に従ったが、過年度調査との整合性を図るため、一部異なる遺構がある。図版等ではトレンチを TR と表記する。
- 4 本書に示した緯度・経度の数値は発掘調査の際に設置した世界測地系の杭による。
- 5 本書の執筆は宇佐市教育委員会弘中正芳、甲斐安寿生、矢部翔平が担当し、編集は甲斐が行った。文責は文末に記す。

目 次

序文

例言

1. 調査の経緯	
(1) はじめに	1
(2) 調査団の構成	1
2. 位置と環境	
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	2
3. 既往調査の概要	
(1) 調査の経緯	4
(2) 検出した遺構	4
4. 今年度の調査内容	
(1) 調査区の位置	5
(2) 基本層序	8
(3) 今年度の調査成果	8
(i) 大型掘立柱建物	8
(ii) 方形区画	12
(iii) 竪穴建物遺構	12
(iv) 掘立柱建物	14
(v) 土坑	16
(vi) その他の遺構	16
(vii) 遺構以外からの出土遺物	16
(4) 小結	
(i) 遺構の重複関係と時期	17
(ii) 大型掘立柱建物(SB-01)について	17
5. 総括	
(1) 小部遺跡の古墳時代前期の遺構と遺物	18
(2) 小部遺跡における遺構の時期別変遷	21
(3) 小部遺跡の集落構成	23
(4) 周辺の遺跡との関係	23
(5) 全国の同時期集落との比較	26
(6) まとめ	32
写真図版	34

1. 調査の経緯

(1) はじめに

小部遺跡発見の契機は、昭和40年代に土木工事でほぼ完形の甕形土器1点が発見されたことによる。発見された土器は古墳時代初めの吉備地方の土器に類似した特徴をもち、小部遺跡は外来系の古式土師器が出土する遺跡と周知されるようになった。

その後、昭和57年に宇佐市教育委員会による住宅建築に伴う事前調査で、黒川沿いの段丘上で古墳時代を中心とする集落遺跡の存在が確認され、さらにその後の調査で、それらの遺構は環濠の内側に方形区画を伴う古墳時代初頭から前期のいわゆる豪族居館跡であることが明らかになった。

今回の調査では、方形区画内部から大型掘立柱建物跡が発見され、豪族居館での中心的な建物の存在が明らかとなった。また、遺構の重複関係等から、大型掘立柱建物に先行する竪穴建物や後出する掘立柱建物を確認し、小部遺跡の遺構変遷を追う上での重要な資料を得た。

・調査の期間

平成31年3月28日(木)~令和元年7月12日(金)

・調査原因

宅地造成及び住宅建設

(2) 調査団の構成

調査主体者	宇佐市教育委員会
調査責任者	宇佐市教育委員会教育長 竹内新
調査指導委員	真野和夫(元大分県立歴史博物館副館長) 武末純一(福岡大学人文学部教授) 玉田芳英(奈良文化財研究所都城発掘調査部部長) 田中裕介(別府大学文学部教授)
調査指導機関	文化庁 大分県教育庁文化課
調査協力	箱崎和久(奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室室長) 越智淳平(大分県立歴史博物館主任研究員) 久住猛雄(福岡市経済観光文化局埋蔵文化財課)
宇佐市教育委員会	教育次長 上田誠之 社会教育課長 野勝教 文化財係総括 矢野貴晃 主任 弘中正芳 主事 中野秀俊 技師 甲斐安寿生 技師 矢部翔平 臨時職員 青柳由佳里

2. 位置と環境

(1) 地理的環境

宇佐市は、大分県の北部、^{くにさき}国東半島の付け根にある。市北部には、標高 40~200m の台地と県内有数の平野である宇佐平野が展開し、その北側には瀬戸内海の西端・^{すおうなだ}周防灘を望む。河川は、^{やつかん}駅館川を中心に、西側には^{いろは}伊呂波川、東側には^{よりも}寄藻川の大きく 3 つの水系と小河川が周防灘に注ぐ。小部遺跡は^{こべ}駅館川の西方約 1.5km に位置する^{くろかわ}黒川左岸にある。四日市丘陵から北に延びる低位段丘上に位置し、標高は 8m 前後である。遺跡の東側は昭和 40 年代の河川工事より前の黒川流路跡が水田に利用されており、遺跡のある台地より 4m 程度低くなっている。

(2) 歴史的環境

旧石器・縄文時代 小部遺跡周辺では縄文時代までの遺跡の確認例がなく、寄藻川流域や伊呂波川流域に集落と貝塚の分布が集中する状況とは大きく様相が異なる。

弥生時代 ^{ひがしうえだ}駅館川兩岸に多数の集落・墓地が営まれる。中期には、^{ひがしうえだ}東上田遺跡をはじめとした集落群が展開し、^{ひがしうえだ}駅館川右岸台地が人々の活動の中心地となる。後期から終末期には、^{ひがしうえだ}駅館川右岸の集落は縮小する一方で、左岸の河岸段丘や沖積平野に、列島唯一の朝鮮式小銅鐸が出土した^{びゅう}別府遺跡等の集落が展開する。これに対応する墓地は、集落の数に比して確認事例が少ないが、^{かわべ}川部遺跡や^{ほんまる}本丸遺跡でみられる鏡や鉄器の副葬や、特定個人墓である^{こいなり}古稻荷古墳の築造など、古墳時代への胎動を示す新たな様相が加わる。以上のように、集落は^{ひがしうえだ}駅館川右岸から左岸へと中心を移しながら断続的に営まれ、墓地は前期から終末期を通じて^{ひがしうえだ}駅館川右岸に築かれる傾向が強い。

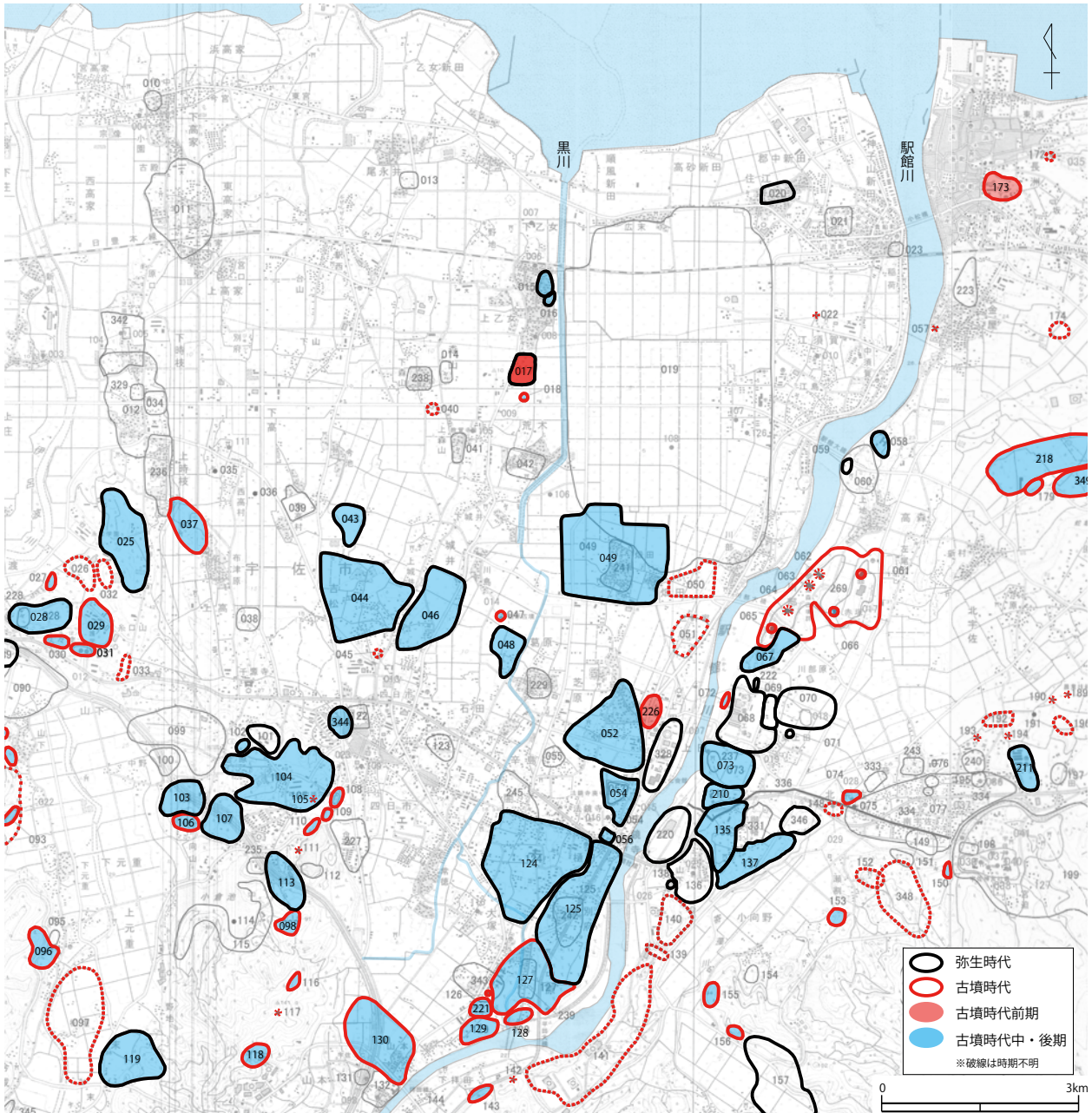
古墳時代 ^{かわべ}駅館川右岸で、^{たかもり}川部・高森古墳群の築造が開始された。前期前半の赤塚古墳を皮切りに連続的に 5 基の前方後円墳が築かれた。これらは宇佐地域の首長墓と考えられているが、これに対応する集落はほとんど未発見である。前期の集落は、現状で確認されたのは小部遺跡と^{いわがね}岩金遺跡、長洲城跡のみで、小部遺跡と岩金遺跡からは外来系土器が多数出土した。特に小部遺跡は、2ヶ所の突出部のある環濠内部に方形区画をもつ構造から豪族居館の機能が以前より想定され注目されてきた。今回の第 19 次調査では、方形区画内部から大型掘立柱建物が発見され、より一層豪族居館の可能性を強める結果となった。この調査の詳細は後章で記す。中期後半には、宇佐平野中央に大型円墳である^{くずわら}葛原古墳が突如築造された。前期の^{かわべ}川部・高森古墳群でみられるような前方後円墳の築造が停止することから、この時期に地域社会の変化があったと考えられる。この頃の集落は、^{ひがしうえだ}別府遺跡や中屋敷遺跡などがある。後期前半には、^{つるみ}鶴見古墳を最後に宇佐地域での首長墓の築造はなくなり、小規模古墳や横穴墓が点在する状況に変わる。この頃になると集落の数・分布域ともに増加する。

古代 宇佐市域では法鏡寺廃寺、^{こくぞうじ}虚空蔵寺等の多くの古代寺院が建立され、また官道が整備された。8 世紀初頭には八幡信仰が成立し、神亀 2(725)年には^{おぐらやま}小椋山に宇佐宮の社殿が造立された。宇佐宮の重要な祭礼に関わる八つの神社は奈良時代以降「^{はちかじや}八箇社」と称され、^{ぎょうこうえ}行幸会等において重要な役割を担った。小部遺跡の約 300m 北側には、この八箇社のひとつである^{おとめ}乙咩神社が社殿を東に向けて鎮座する。なお、^{ひがしうえだ}駅館川と^{くろかわ}黒川の間は入江であったと推定され、奈良時代に条里として開拓されたことにより海岸線は大幅に北上した。

中・近世 鎌倉時代以降は城館が市内に多数営まれる。近世以降は、宇佐市域の海岸部全域で新田開発に伴う干拓が行われ、中世に比してさらに海岸線が北上している。

近代 昭和 14 年に宇佐海軍航空隊が開隊し、宇佐地区条里跡に飛行場が造成され多くの掩体壕や機銃陣地が築造された。小部遺跡の^{くろかわ}黒川左岸の大部分は、検出面からの深さが 10cm 程と大幅な削平を受けており、こうした近代の開発が影響していると考えられる。

現代 昭和 40 年代に始まった大規模圃場整備に伴い、市内の台地や丘陵地を除く多くの土地は水田化された。その際、小部遺跡東側を流れる黒川は、蛇行していた流路が直流して周防灘に注ぐよう数 10~100m 前後東に移すという大規模な河川工事が実施された。(矢部)



- | | | | | | |
|--------------|-----------|------------------|-------------|--------------|-----------|
| 015 下乙女遺跡 | 046 城井遺跡 | 069 一盃田遺跡 | 117 柳沢遺跡 | 144 小路迫横穴墓群 | 189 小坂山古墳 |
| 016 乙岬神社境内遺跡 | 047 葛原古墳 | 070 野口遺跡 | 118 石和田横穴墓群 | 145 後山横穴墓群 | 190 潮見塚古墳 |
| 017 小部遺跡 | 048 葛原遺跡 | 071 極尻道遺跡 | 119 末遺跡 | 146 土祖神元横穴墓群 | 192 老ノ上遺跡 |
| 018 御塚石棺 | 049 畑田遺跡 | 072 女鹿横穴墓群 | 124 樋田遺跡 | 147 小路迫古 | 193 老ノ上古墳 |
| 020 屋敷遺跡 | 050 井手神遺跡 | 073 高居遺跡 | 125 別府遺跡 | 150 大善寺横穴 | 194 両塚古墳 |
| 022 中園遺跡 | 051 上川原遺跡 | 074 凶首塚古墳 | 126 大塚古墳 | 152 瀬割古墳 | 196 平石古墳群 |
| 025 糸口山遺跡 | 052 中屋敷遺跡 | 098 宮山横穴墓群 | 127 中原遺跡 | 153 笛吹築跡 | 210 下原遺跡 |
| 026 前台古墳 | 054 法鏡寺遺跡 | 101 稲丸遺跡 | 128 井原古墳群 | 155 牛房横穴墓群 | 211 辻平遺跡 |
| 027 三ツ岩横穴 | 056 上浦遺跡 | 102 東桐ヶ迫遺跡 | 129 井手ノ上古墳 | 156 百穴横穴墓群 | 218 野田遺跡 |
| 028 台遺跡 | 057 廟森古墳 | 103 正布迫遺跡 | 130 下林遺跡 | 157 逆師遺跡 | 220 川島遺跡 |
| 029 糸口遺跡 | 058 四十塚遺跡 | 104 台ノ原遺跡 | 134 切寄横穴墓群 | 158 屋敷横穴墓群 | 221 塔ノ本遺跡 |
| 030 久々姥遺跡 | 059 本丸遺跡 | 105 池ノ奥遺跡 | 135 御幡遺跡 | 172 高倉古墳 | 222 女鹿遺跡 |
| 031 久々姥古墳群 | 061 赤塚古墳 | 106 向山古墳群 | 136 上原遺跡 | 173 長洲城跡 | 226 岩金遺跡 |
| 032 針山古墳 | 062 角房古墳 | 107 柳沢遺跡 | 137 御幡村際遺跡 | 174 妙善田古墳 | 328 中川遺跡 |
| 033 高林塚遺跡 | 063 車坂古墳 | 108 四日市横穴墓群一鬼平 | 138 古稻荷古墳 | 175 小塚本古墳 | 344 出口遺跡 |
| 037 鶴先遺跡 | 064 福勝寺古墳 | 109 四日市横穴墓群(加賀山) | 139 鳥越隧道上古墳 | 176 原塚古墳群 | 346 戎原遺跡 |
| 040 池田遺跡 | 065 免ヶ平古墳 | 110 小菊古墳群 | 140 恵古ノ下古墳群 | 179 新池築跡 | 348 山守平遺跡 |
| 043 上立遺跡 | 066 鶴見古墳 | 111 宮山古墳 | 141 蛭子ヶ原遺跡 | 181 野森古墳 | 349 立出遺跡 |
| 044 吉松遺跡 | 067 川部遺跡 | 113 松ヶ平遺跡 | 142 稻荷山古墳 | 182 原山古墳 | |
| 045 扇塚古墳 | 068 東上田遺跡 | 116 落ヶ迫横穴群 | 143 山ノ下横穴墓群 | 186 狐塚古墳 | |

第 1 図 遺跡位置図(S=1/50000 大分県遺跡地図 2018 年版を一部改変)

3. 既住調査の概要

(1) 調査の経緯

小部遺跡の調査の契機は、昭和40年代に遺跡周辺で行われた土木工事での吉備系の古式土師器(甕)の発見による。その後、宇佐市教委が昭和57年～平成12年に重要遺跡確認調査(第1次～第17次調査)と、平成23年の個人住宅建築に伴う記録保存調査(第18次調査)を実施した。

(2) 検出した遺構

過去の調査で、南西側に2か所の突出部がある南北120m、東西100m以上の規模の環濠SD-01が発見された。SD-01の内側には柵跡とみられる布掘溝SD-02が巡らされ、さらに環濠SD-01の中心部には南北50m、東西37m布掘による方形区画SD-03が発見されている。また、遺跡からは庄内系土器や布留系土器といった外来系土器が多数出土した。

調査の結果、小部遺跡の突出部をもつ溝で囲まれた中心遺構は、古墳時代前期初頭から前期前半にかけてのいわゆる豪族居館跡と考えられるようになった。さらに環濠SD-01と方形区画SD-03の掘削には時期差があり、環濠のみをもつ集落から環濠の内側に方形区画をもつ構造へ変化することも判明している(佐藤編2004、他)。なお、SD-03は赤塚古墳が造られた時期(古墳時代前期前半)と同時期の遺構と考えられ、居館と前方後円墳の関係が想定できる事例としても注目された(武末2000)。(弘中)



第2図 小部遺跡 遺構配置図 (S=1/1500)

4. 今年度の調査内容

(1) 調査区の位置 (第2図・第3図)

調査地点は、過去に発見された方形区画 SD-03 内のほぼ中軸上に位置する場所であり、第14次調査では SD-03 に平行して一列に並ぶ3基の不定形土坑 (SK13、SK14、SK15^{*1}) を検出した。3基の土坑からは遺物が出土せず、詳細な時期は明らかではないものの、3基が南北に一列に並ぶことやいずれの遺構も東端部に柱穴状のピットを持つこと等から、掘立柱建物の一部である可能性が指摘されていた。

今回の調査では、これら遺構と規模・方位を同じくする柱穴を確認し、一棟の大型掘立柱建物 SB-01 が確認された。また、遺構の重複関係等から大型掘立柱建物 SB-01 に先行する竪穴建物跡や、後出する掘立柱建物跡を確認し、小部遺跡の遺構変遷を追う上での重要な資料を得た。なお、今回記した遺構番号は、過年度調査と今回の調査における仮番号を用いた。(甲斐)



第3図 第19次調査地点 (S=1/400)



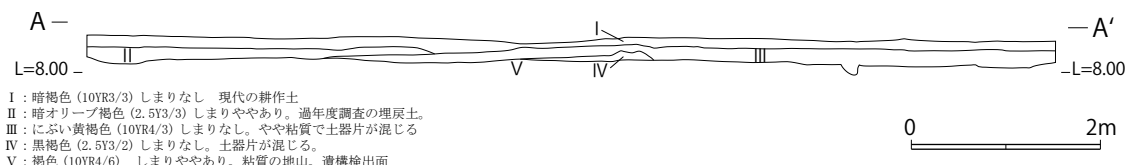
写真1 小部遺跡 第19次調査地点空撮(倍率任意)



第4図 小部遺跡 第19次調査地点遺構配置図 (S=1/150)

(2) 基本層序

調査区の基本層序は、現代の耕作土 (I 層) の下に、攪乱層である地山に由来する土が混じるに
ぶい黄褐色土層 (III 層) が堆積し、現況地表から約 0.3 m で遺構検出面である褐色土層 (V 層) に達
する。なお、調査区西側には過年度調査の埋戻土である暗オリーブ褐色土層 (II 層)、調査区中央に
は少量の遺物を含む凸レンズ状の黒褐色土の堆積 (IV 層) がある。調査地点の標高は 8.3 m 程であり、
西から東に向けて緩やかに傾斜する。



第 5 図 小部遺跡 基本層序図 (S=1/80)

(3) 今年度の調査成果

(i) 大型掘立柱建物 SB-01 (第 6 図)

調査区西側で検出した大型掘立柱建物跡である。主軸は N5-6° E で真北からやや東にふれる。柱穴は
約 2 m 間隔で並び、建物規模は桁行 4 間 (8.05m)、梁行 3 間 (5.6m)、平面積 45.08m² である。建物の構
造は各柱の交点に束柱を配すことから、総束柱建物と考えられる。各柱穴の規模等を第 1 表に示す。

第 1 表 大型掘立柱建物 SB-01 柱穴一覧

遺構名	柱の種類	長径 (cm)	短径 (cm)	最大深 (cm)	柱 痕 等	抜 取	遺 物		備 考
							層位	器種	
SP60	側柱	149	67	-	-	-	I 層	甕	他遺構との切り合い多数。全形不明瞭 遺物小片のみ。
SP78	側柱	173	61	-	-	-	検出面付近	高坏?	
SP85	側柱	146	70	63	第 II 層に柱底面痕跡残る (径 21cm)	有	埋土中	甕?	遺物小片のみ
SP90	側柱	145	91	62	第 VII 層が柱の基底面か? (幅 31cm)	有	上層	甕、他	上層出土胴部片と接合
							IV 層	甕	
							VII 層	壺	
SP211	側柱	188	102	-	-	-	検出面付近	壺、 鞆羽口?	平面検出のみ
SK15	側柱	183	71		底面に柱痕跡残る (径 20cm)	有	-	-	遺構名は過年度調査から踏襲
SK14	側柱	204	94	64	底面柱痕跡残る (径 24cm)	?	埋戻土	甕、他	遺構名は過年度調査から踏襲 埋戻土のため土層断面観察不可
SK13	側柱	203	89	60	底に柱底面痕跡残る (径 24cm)	?	埋戻土		遺構名は過年度調査から踏襲 埋戻土のため土層断面観察不可
SP213	側柱	161	75	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP212	側柱	157	73	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP152	束柱	23	22	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP203	束柱	32	25	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP206	束柱	49	41	22	不明	?	-	-	
SP77	束柱	50	32	38	柱底面痕跡残る (径 13cm)	有	上層	甕?	遺物小片のみ
SP215	束柱	34	30	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP202	束柱	41	34	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP133	束柱	33	27	-	-	-	-	-	平面検出のみ
SP205	束柱	40	33	37	不明	?	上層	甕?	小片のみ
SP97	束柱	68	61	35	不明	?	-	-	
SP214	束柱	21	18	-	-	-	-	-	平面検出のみ

柱の底面痕跡を確認できた柱穴から、使用された木材の直径は主柱穴（側柱）で約0.2~0.3m、束柱で0.15m前後と推定できる。主柱穴は長径約1.5~2.0m、短径約0.8~0.9m、最大深0.6m程の楕円形状の掘方をもつ。束柱は、上面が削平を受け規模が不明なものもあるが、おおむね長径0.25~0.5m前後、短径0.2~0.4m前後、最大深0.38m程である。

詳細は「土層」の項で後述するが、主柱穴は柱設置部に黒褐色土が、柱設置部の反対側（建物の外側）に付く楕円形状の掘方に、地山由来の黄褐色土のブロック（以下、地山ブロック）が堆積する。

土層（第6図）

上記柱穴のうち、土層断面は5基で確認した。

SP90

I層~III層は黒褐色を主体とした土に地山ブロックを部分的に含むのに対し、IV、VI、VIII層は地山ブロックを全体的に多く含む。またVII層は幅31cm、層厚7~10cmの固くしまった粘質土が堆積し、その下のV層は単一の暗褐色土層となる。

VII層は上面が平坦になる。VII層を柱を据えた際の設置面と仮定すると、その下位にあるV層は、深く掘りすぎた箇所の調整用に埋戻した土と考えられる。VI層には地山ブロックが多く含まれ、柱掘方の埋土と考えられる。掘方は建物の外側に向けてスロープ状に傾斜しており、スロープ部の埋土（IV層、VIII、IX層）にも地山ブロックを多く含む。建築時にスロープ部に沿わせて柱材を挿入し、引き起こした後に埋戻した様子が伺える。

VII層より上位では地山ブロックが少なくなり、明確な柱痕跡は確認できなかったため、I層からIII層は柱抜き取り穴の埋土と判断した。なお、詳細は「出土遺物」の項で後述するがI、II層からは古墳時代前期後半の特徴をもつ甕が出土しており、遅くとも前期後半までには柱の抜き取りが行われた可能性が高い。

SP85

I、II層は、黒褐色土を主体とし、地山ブロックを一部に含む程度である。一方、III層及びIV層は地山ブロックを多く含み、I、II層よりも明るい黒褐色層となる。またI、II層に比べると、III、IV層は若干ではあるが土がしまる。

本遺構でも明確な柱痕跡は確認できず、I、II層の東側が東向きに大きく開き、西側は西に向け反りあがることから柱を東に傾けて抜き取ろうとした様子が伺える。本遺構の東側は半裁しておらず、またSB-03の柱穴SP209に切られるため、詳細は不明であるが、I、II層に比べ地山ブロックの混ざりが多くなることから、本遺構も柱挿入のためのスロープ状の掘り方をもつ可能性が高い。地山ブロックを多く含むIII、IV層は柱掘方の埋土で、I、II層は柱抜き取り穴の埋土と考えられる。

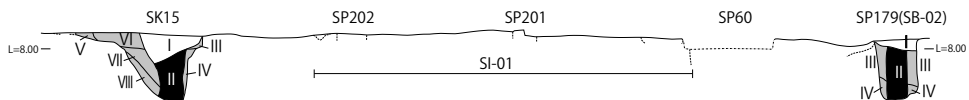
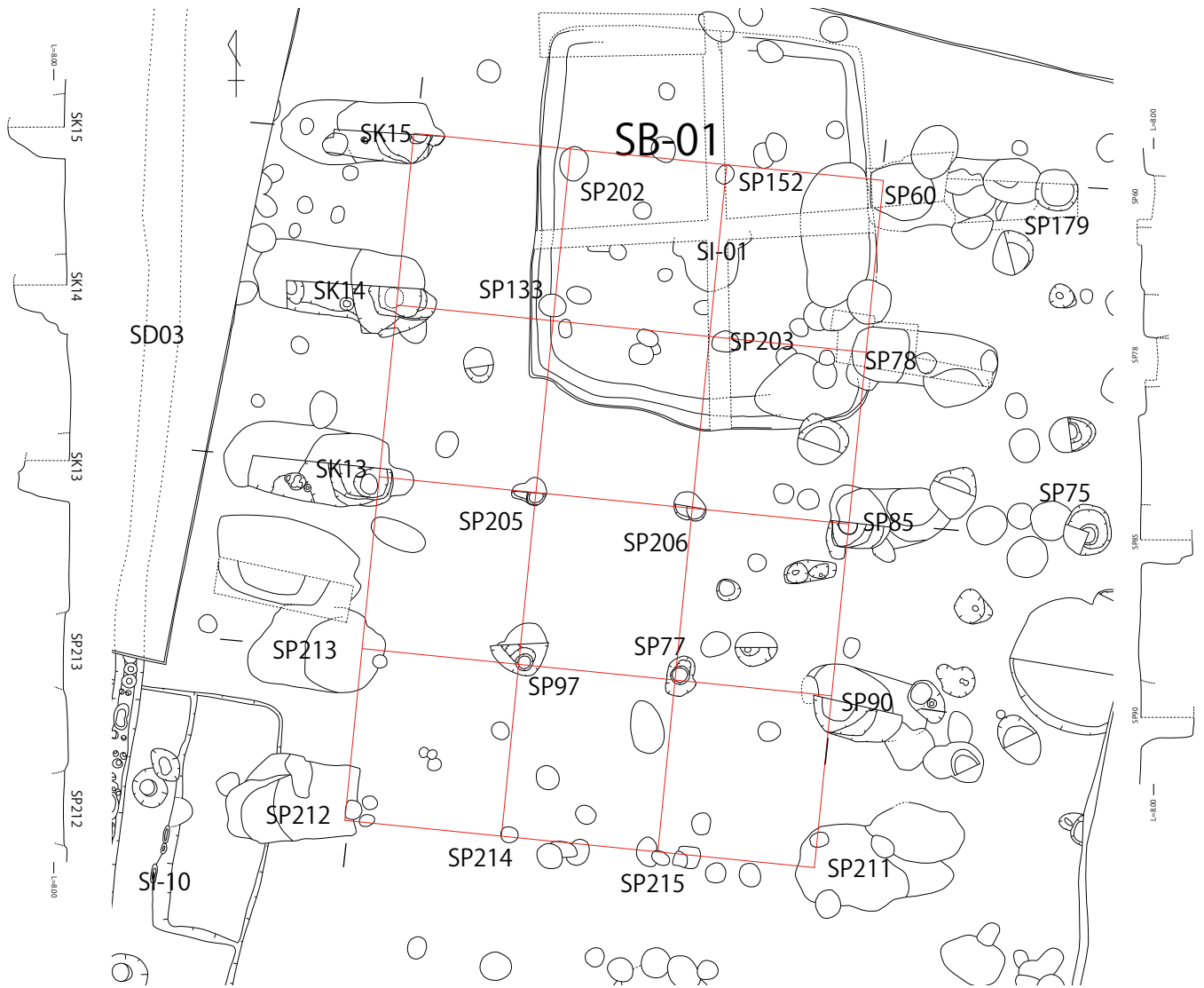
SK15

I、II層は黒褐色層に地山ブロックを若干含む程度で抜き取り穴と考えられる。それに対し、IV層及びスロープ部の埋土であるV層~VIII層は地山ブロックを多く含むため、SP90同様IV~VIII層は柱掘方の埋土と考えられる。なお、III層はSK15の東側（建物側）に付く小穴の堆積層である。この小型ピットは、SK15との位置関係や深さから、SK15に付随する際束の可能性もある^{*2}。

また底面から約0.4~0.5mは柱の立ち上がりが確認でき、I層の上面からは炭化物が出土したため、抜き取りの途中で柱を切断した（あるいは自然に折れた）可能性も考えられる。

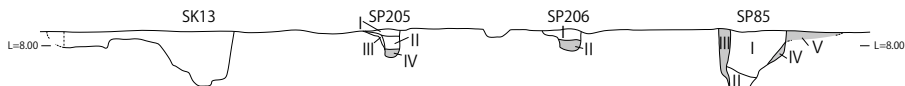
SP205

本遺構も土層から明確な柱痕跡は確認できない。IV層は固くしまる粘質土であるため、深く掘りすぎたため調整用として入れた土を柱の設置面にしたと考えられる。またIII層は地山由来の黄褐色土が多く混ざるため柱掘方の埋土とみられるが、柱を抜く際に攪乱を受けた土である可能性もある。また柱穴底



- SK15**
- I : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/4) のブロックを含む
 - II : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/4) のブロックを少量含む
 - III : 暗褐色 (10YR3/4) しまり弱 黒褐色 (10YR2/2) のブロックを含む
 - IV : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR2/2) のブロックを含む
 - V : 暗褐色 (10YR3/3) しまり弱 黄褐色 (10YR5/6) のブロックを含む
 - VI : 暗褐色 (10YR3/3) しまり弱 褐色 (10YR4/4)、黄褐色 (10YR5/6) のブロックを含む
 - VII : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/4) のブロックを含む
 - VIII : 黒褐色 (10YR3/3) しまり弱 褐色 (10YR4/4)、黄褐色 (10YR5/6) のブロック、炭化物を含む

- SP179**
- I : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/6) のブロックを含む
 - II : 黒褐色 (10YR2/3) しまり弱 黄褐色 (10YR5/6) のブロックを少量含む
 - III : 暗褐色 (10YR3/4) しまり弱 黄褐色 (10YR5/6) を多く含む
 - IV : 暗褐色 (10YR3/3) しまり弱 柱痕



- SP205**
- I : 暗褐色 (10YR3/4) しまり弱
 - II : 黒褐色 (10YR2/3) しまり弱
 - III : 褐色 (10YR4/4) しまり強
 - IV : 暗褐色 (10YR3/3) のブロックを含む
 - V : 黒褐色 (10YR2/2) しまり強
- SP206**
- I : 暗褐色 (10YR3/4) しまり強
 - II : 黒褐色 (10YR2/2) しまり強
- SP85**
- I : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 暗褐色 (10YR3/3)、黄褐色 (10YR5/6) のブロック含む
 - II : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 I層より若干暗い
 - III : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 暗褐色 (10YR3/4) の粒小ブロックを含む
 - IV : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/4) の粒大ブロックを含む
 - V : 黒褐色 (10YR3/2) しまり弱 褐色 (10YR3/2) の粒大ブロックを含む



- SP90**
- I : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/6) の粒小ブロックを少量含む
 - II : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/6)、黒 (10YR2/1) のブロック含む
 - III : 黒褐色 (10YR2/3) しまり弱 褐色 (10YR4/6) のブロックを含む
 - IV : 黒褐色 (10YR2/2) しまり弱 褐色 (10YR4/4) の粒大ブロックを含む
 - V : 暗褐色 (10YR3/3) しまり弱
 - VI : 暗褐色 (10YR3/3) しまり弱 黄褐色 (10YR5/6) の粒大ブロックを含む
 - VII : 黒褐色 (10YR2/2) しまり強 黄褐色 (10YR5/6) の粘質ブロックを含む



- 凡例**
- 柱抜き取り穴
 - 柱掘方
 - 柱痕跡

第6図 SB-01 実測図 (S=1/80)

部はやや西側に反り返ることから、東側に傾けて向き取りを試みた可能性が考えられる。

SP206

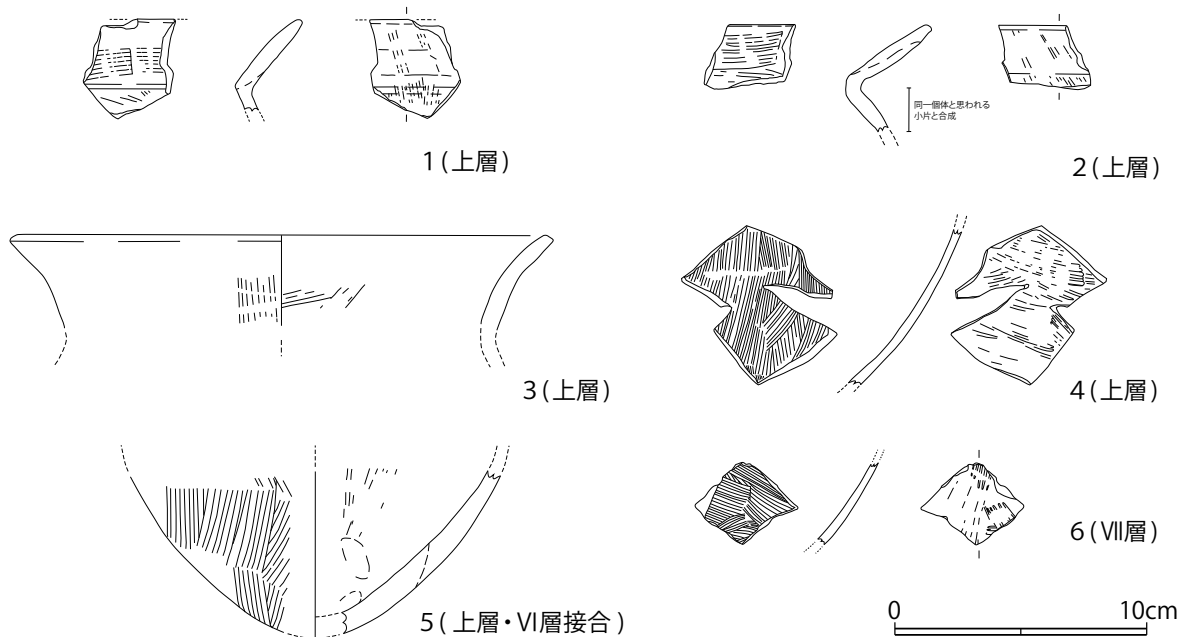
埋土は SP205 と酷似し、柱痕跡は確認できない。Ⅱ層は粘質のしまりの強い土が堆積するため、柱を据える際の深さ調整用の土と考えられる。また西側に延びる掘方はⅠ層と同様の埋土のため、抜き取り時に掘ったものである可能性がある。

出土遺物 (第7図)

出土した遺物は残存率 1/6 以下の小片がほとんどで、SP90 の出土遺物のみ図化できた。なお、検出面付近で出土した遺物は土層細分ができず、上層として取り上げたが、これらの遺物はⅠ層あるいはⅡ層出土である。

1 は上層出土の甕口縁部である。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部をやや外側につまみ上げる。外面は頸部から口縁部にかけて左上がりのハケメを施した後、口縁部をヨコナデでナデ消す。また肩部にはタテハケを施す。内面は口縁部ヨコハケ後、頸部から口縁部にかけてヨコナデしており、胴部には左上がりのヨコハケが見られる。2 も SP90 の上層から出土した甕口縁部である。口縁部の中程をやや肥厚させ、胴部との接合部は強いナデにより稜ができる。外面はタテハケの後に口縁部を丁寧にナデ消しており、内面も頸部及び口縁部にヨコハケを施し、それをナデ消す。3 は上層出土の甕の口縁部である。復元口径は 21cm である。口縁部中程から上端にかけやや肥厚する。内外面ともハケメ後ナデ消しを行っており、特に口縁部は強い横ナデにより調整している。4 は上層出土の甕の胴部片である。胎土は緻密で、器壁も他の土器に比べると 5mm 程度と薄い。外面はナナメ方向の弱いミガキを施し、内面はタテハケ後ナナメ方向にハケメを施す。5 は甕の胴部から底部と思われる。上層とⅥ層出土のものが接合した。底部はやや尖る。器壁は、胴部は 5mm 程度であるが、底部にかけ厚くなり 1cm 程になる。外面は幅 4cm 程の強いハケメを施し、内面はハケメ後ナデ消しを行っている。破片の上部には一部黒斑が見られる。6 は SP90 Ⅶ層出土の壺の胴部片である。胎土は緻密で、器壁も 3~4mm 程と薄く、他の土器に比べ丁寧な作りである。外面はタタキ後弱いミガキを施し、内面は幅 1.5~2cm 程度のハケメを施す。なお、6 は焼成後外面からの叩打等により、方形に打ち欠き形を整えており、何らかの祭祀行為に使用された可能性がある。

今回出土した遺物は在来系土器が多いが、ヨコナデによる口縁部の調整やくの字に強く屈曲し、中程がやや肥厚する口縁部など布留系土器の影響を受けた遺物もある。



第7図 SP90(SB-01) 出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物のほとんどが小片であり、SB-01の詳細な時期比定を行うことは難しいが、2は口縁部の特徴から、他の出土土器に比べ新しい様相(古墳時代前期後半)を示す^{*3}。前項で示したとおりSP90Ⅰ、Ⅱ層は柱の抜き取り後(=建物廃絶後)の埋土であり、遅くとも古墳時代前期後半には柱の抜取が行われ、建物が完全に廃絶したことが分かる。

(ii) 方形区画SD-03(第4図)

調査区の西側で方形区画SD-03を再検出した。過年度調査で東西37m、南北50mの長方形で、溝幅0.2~0.3m、検出面からの深さは0.15~0.25mと判明している。主軸は、N5-6°EでSB-01の主軸と概ね一致する。底面ではほぼ間隔をおかず連続する小穴が確認されており、SB-01を囲む柵であった可能性が高い。またSB-01西側の支柱穴との距離は平均して1.5m前後で、SB-01はSD-03西側に近接して建てられたとみられる。時期は過年度調査の出土遺物から、古墳時代前期前半である。

(iii) 竪穴建物遺構

SI-10(SH-10^{*4} 第9図)

今年度調査では、建物東側を再検出した。規模は第7次調査で、東西5.5m、南北5m、検出面からの深さ約0.2mと判明した。支柱穴4本、中央炉で北東にベッド状遺構をもつ。出土遺物から、古墳時代前期初頭である。また本遺構は大型掘立柱SB-01の支柱穴のSP212と方形区画SD-03に壊されるため、SD-03及びSB-01に先行する遺構であることが明確である。

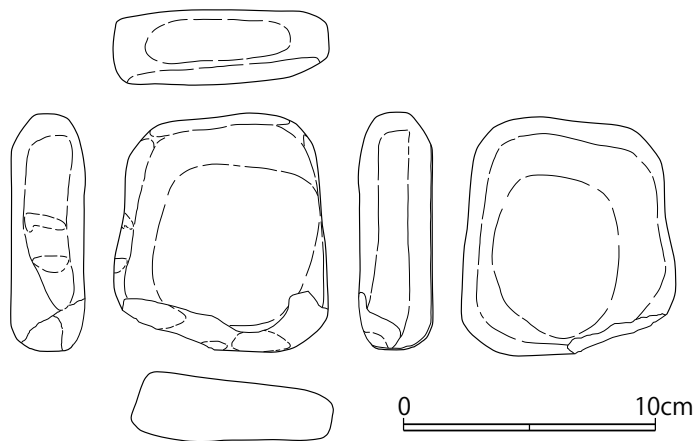
SI-01(第10図)

調査区の北側中央部で検出した竪穴建物である。第14次調査で西側一部を検出していたが、今回全面検出しその規模が明らかとなった。建物の規模は、東西4m、南北4.8mで、検出面からの深さは0.1m前後であり遺構の上面は後世にかなりの削平を受けている。支柱穴は南東側では未確認だが、SI-10同様4本と推定され、中央に炉を配す。また北西部に長方形の高まりがありベッド状遺構の可能性もあるが、削平が激しく詳細は不明である。壁に沿って幅約0.2mの壁溝を巡らす。

第8図はSI-01南東部の床面直上から出土した砥石である。最大長8.1cm、最大幅7.4cm。粒度が粗く、荒砥として使用されたと思われる。表を主砥面としており、その他の面には砥石製作時の加工痕が残る。

SK20 長径1.7m、短径0.7mの楕円形土坑で、本遺構の土器片とSI-01内出土の土器片が接合することから、SI-01に伴うとみられる土器溜り遺構である。

第11図1は、長頸壺の頸部から胴部である。胴部上端から頸部をしぼり、外面ハケメ後胴部上端を丁寧にヨコナデによってナデ消す。内面の胴部上半に指オサエが見られる。2は鉢である。復元底径は5.2cmである。胴部はやや丸みを持ち、底部はやや外反し、平底の名残を残す。内外面ともに胴部にハケメ後、指オサエを施す。過年度調査でSI-10から出土した鉢形土器(写真23)と類似する。3は、甕の胴部から底部である。復元底径は、4.5cmである。やや平底の底部にやや長胴の胴部が復元できる。外面は幅2~2.5cm程度の強いタタキが入る。内面はヘラケズリを施した後一部指オサエが見られる。4はSI-01北東側出土の土器片と接合する、高坏脚部である。脚部中程はやや肥厚し、端部はやや内弯する。外面はタテハケ後底部から3cm程まで強くナデ消している。



第8図 SI-01出土砥石実測図(S=1/3)

タタキを残す甕や平底の名残を残す鉢などの特徴から、SI-01の時期は古墳時代前期初頭に比定できる。

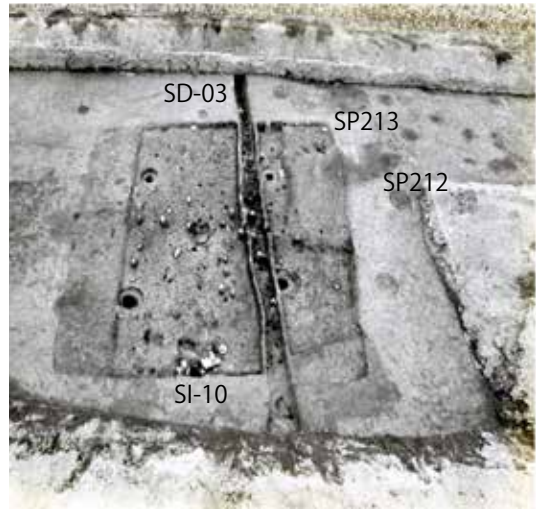
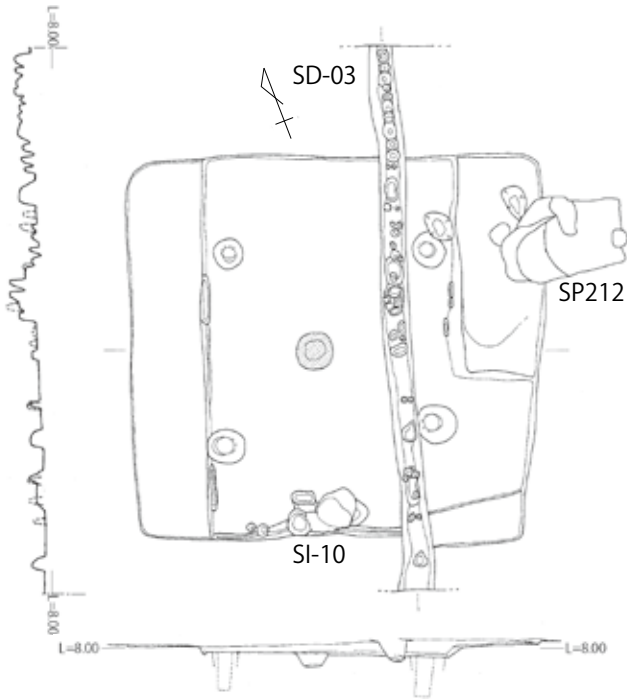
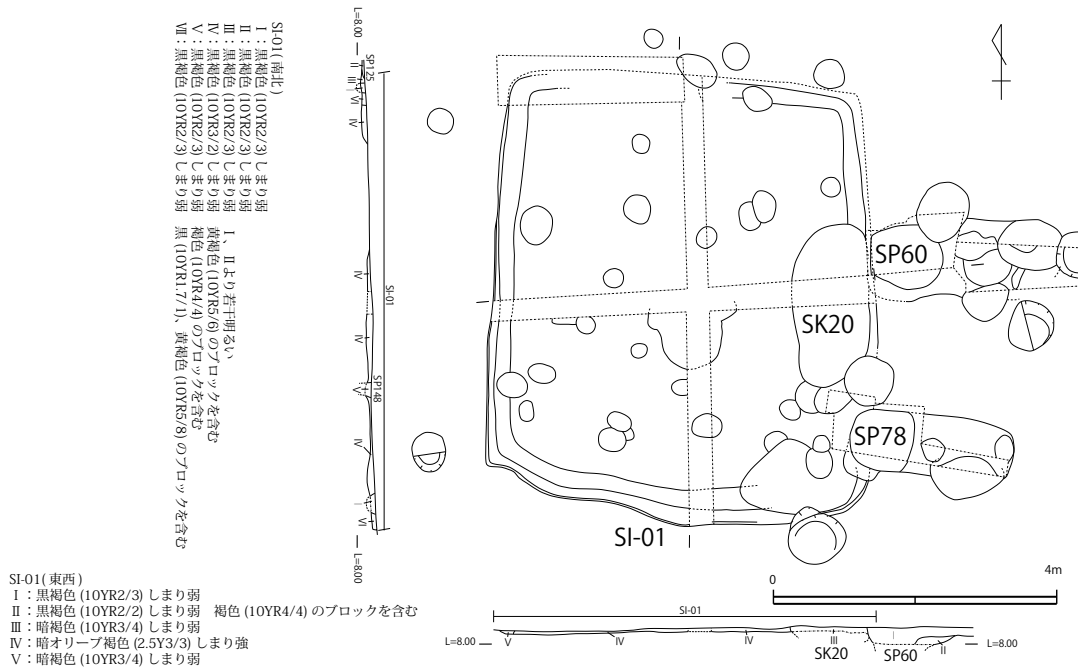
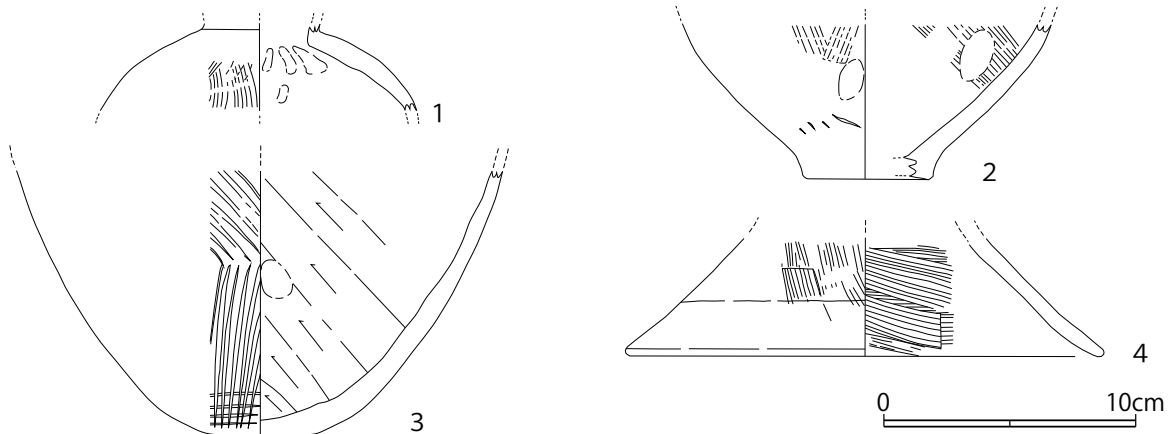


写真2 SI-10 完掘状況(南から 第7次調査)

第9図 SI-10 実測図(S=1/80、第7次調査時の平面図と合成)



第10図 SI-01 実測図(S=1/80)



第11図 SI-01 出土遺物実測図(S=1/3)

SI-02(SH-02^{*4} 第3図、第4図)

調査区北側で最大幅 0.6m、検出面からの深さは 0.1m の溝を検出した。第 2 次調査の 2bTR で検出された竪穴建物跡 (SH-02) の北西側にある。竪穴建物の壁溝が確認されており、連続する溝である可能性が高い。時期比定可能な遺物は出土していない。

(iv) 掘立柱建物 (SB-02、SB-03)

調査区北東部で 2 基の掘立柱建物跡を検出した。

SB-02(第12図、第13図)

SB-02 は桁行 2 間 (3.7m)、梁行 2 間 (3.4m)、平面積 12.58m² の側柱建物である。主軸は N26° E で、SB-01 に比べ東にふれる。柱穴の規模は、直径約 0.5~約 0.65m で、最大深は 0.75m 程である。SB-02 を構成するほとんどの柱穴で明確な柱の立ち上がりが確認できた (第 6 図土層図 SP179)。確認できた柱痕跡から使用された木材は、直径 0.2m 前後と推定できる。

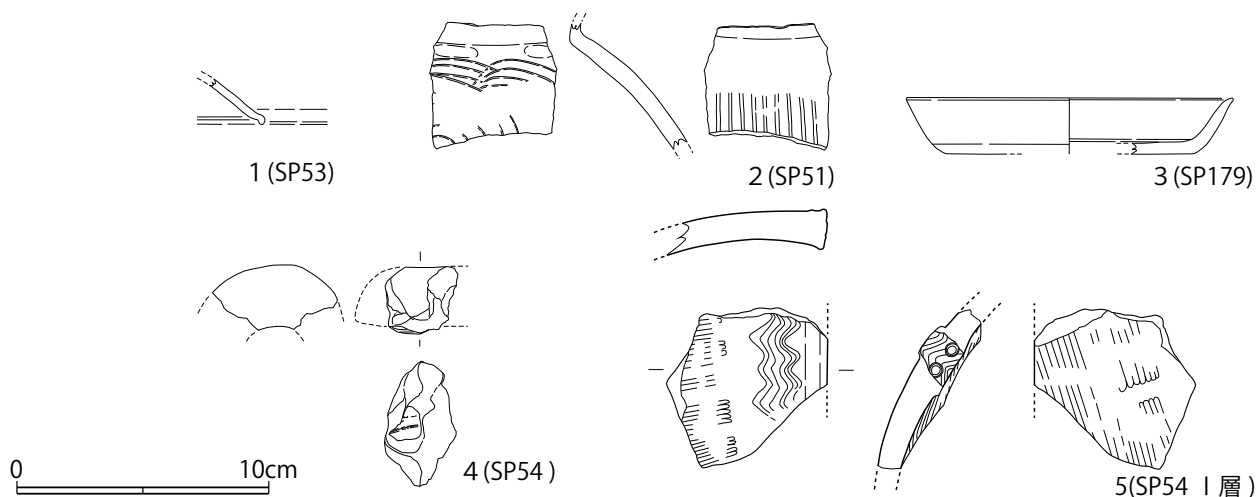
出土遺物は坏蓋、坏、皿、甕、轆羽口等がある。第 12 図 1 は、SP53 I 層 (抜取埋土) 出土の土師器の坏蓋である。口縁部内側のかえりは簡略化され、調整は内外面ともに回転ナデを施す。また内外面には赤色顔料が塗布されている。2 は SP51 II 層 (掘方埋土) から出土した、須恵器片である。肩は張らずなで肩であると思われる。外面は胴部上半にタタキを施した後、頸部から胴部にかけて回転ナデを施す。内面は頸部と胴部の境を指オサエにより整え、胴部はタタキ後ナデ消しを、頸部は回転ナデを施す。3 は、SP179 の中層 (掘方埋土もしくは柱痕跡) から出土した須恵器の皿である。口径 13.5cm、器高 2.3cm で、口縁部がやや外反する。内外面ともに口縁部から胴部にかけて回転ナデを施し、内面底部には指ナデによる調整が見られる。SP54 の I 層 (抜取埋土) からは小片であるが、轆羽口 (第 12 図 4) が出土した。

第 12 図 5 は SP54 I 層 (抜取埋土上層) から出土した手焙形土器の覆部である。外面の口縁端部をややつまみ上げており、口縁部に幅 7~8mm 程の弱い櫛描波状紋を施した後、竹管状の工具により刺突紋を施す。外面は幅 7~8mm 程の櫛描波状紋を、下半部はミガキを行う。内面は幅 1mm 程の細かいタテミガキを施している。小片のため詳細な時期は不明であるが、古墳時代の土器であるため、SI-01 からの混入である可能性が高い。

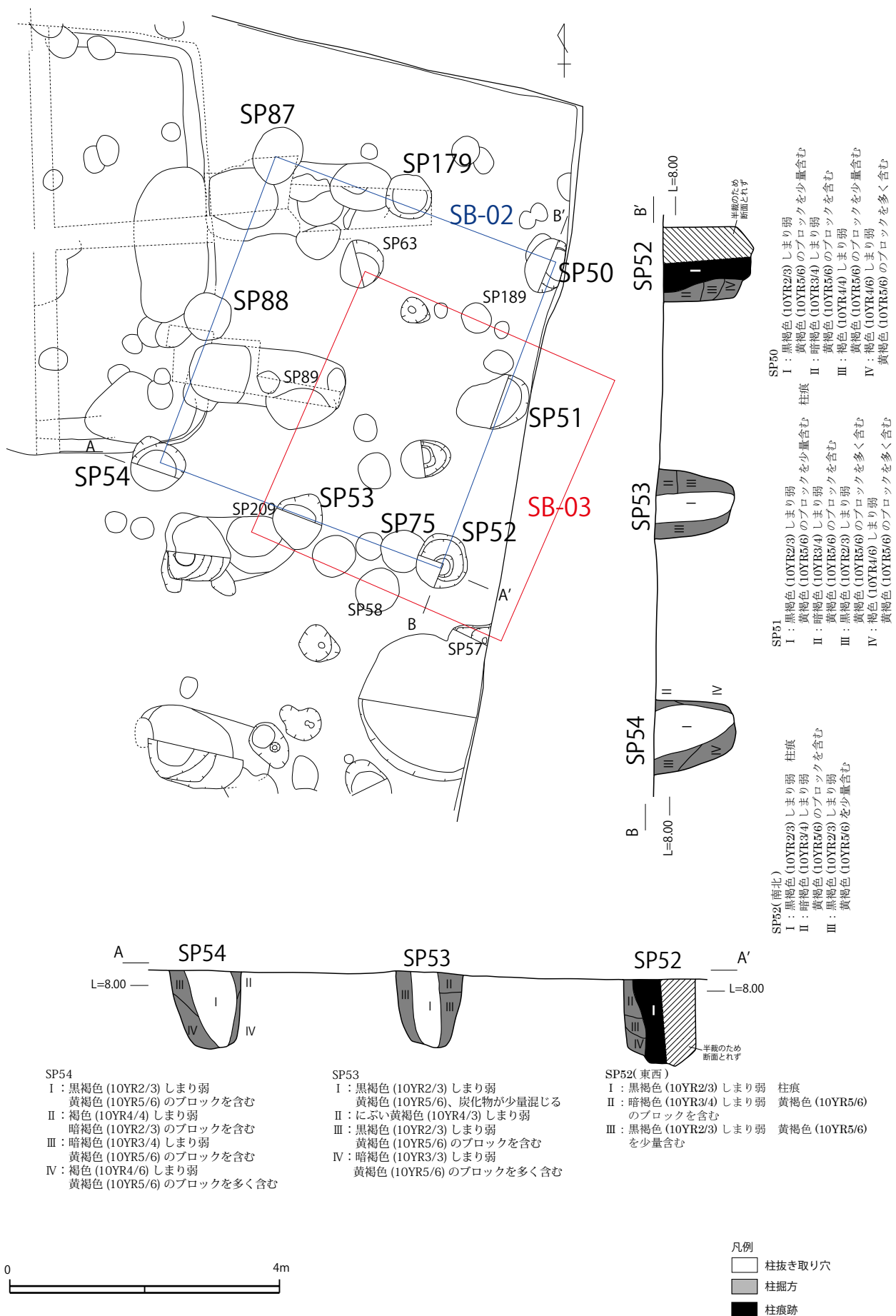
須恵器の簡略化された調整や外反する口縁部の特徴等から、SB-02 の時期は 8 世紀中葉から後葉に比定できる。

SB-03(第13図)

SB-03 は、南東側が調査区外へと延びるため、全体の規模は不明であるが、少なくとも桁行 2 間 (3.2 m)、梁行 2 間以上の規模が復元できる。主軸は N29° E で、SB-02 よりもやや東にふれる。検出した遺



第 12 図 SB-02 出土遺物実測図 (S=1/3)



第 13 図 SB-02、SB-03 実測図 (遺構実測図 S=1/60、土層断面図 S=1/40)

構のうち、SP63のみ掘り下げた。柱穴の規模は直径約0.5m、最大深0.5m程である。出土遺物が少ないため、SB-03の詳細な時期は不明だが、SB-03の柱穴がSB-02の柱穴に壊され、SB-03の柱穴がSB-01の支柱穴の一部を壊すため、少なくともSB-01に後出し、SB-02に先行する遺構と考えられる。

(v) 土坑

SK-16(第4図、第14図)

調査区南東部で検出した長辺約2.6m、短辺約1.5mの隅丸形状土坑である。南東端のみ完掘し、残りは検出面から数cm掘り下げた。遺物は遺構上面や底面から約0.2~0.3m浮いた状態でまとまって出土した。第14図はSK-16Ⅱ層から出土した小型の鉢である。口径9.5cm、器高5.3cmでやや平底を呈し、口縁部はやや内弯する。外面はユビナデ及びびオサエで調整し、内面はハケメ調整後、底部から胴部をユビナデによって仕上げる。

SK-16の出土遺物は、平底を呈す鉢形土器や強いタタキ等、古墳時代初頭頃の特徴を示す。

(vi) その他の遺構(第4図)

SP75

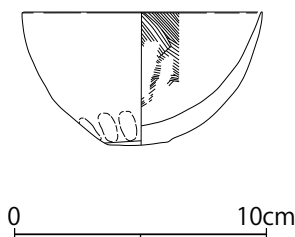
SP85から約2.5m東にある直径0.5m程の柱穴である。平面検出のみのため遺構の詳細は不明だが、SB-02の支柱穴であるSP52に壊されるため、SB-02に明らかに先行する。SK13とSP85を結ぶ軸線の延長線上付近に位置し、SB-01の支柱穴と類似した黒褐色土に黄褐色ブロックが混じる埋土であり、SB-01に伴う遺構の可能性はある。

SP119

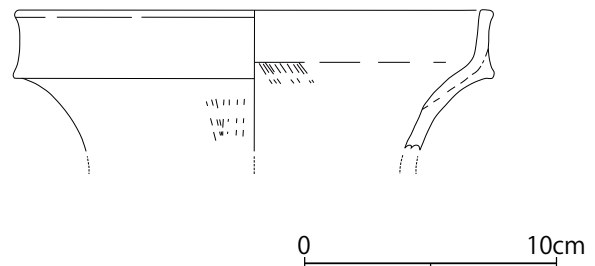
2TR北西端で検出した遺構である。SB-01の支柱穴であるSK15から約5.3m北側に位置する。平面検出のみで、また西側は調査区外にのびるため遺構の詳細は不明だが、SB-01の支柱穴と同様の黒褐色土に黄褐色ブロックが混じる埋土である。また遺構の東側に小型のピットが付く点でもSB-01と類似する。さらに、昭和58年度調査の際1aTRで検出された「土坑状の落ち込み」(第3図1aTR)も、SB-01の東側支柱穴の北側延長線上に位置する。SB-01の北側に別棟の建物が存在する可能性がある。

(vii) 遺構以外からの出土遺物(第15図)

遺構に伴わないが、特筆すべき遺物をあげる。第15図に示した遺物は調査区周辺で表面採集した、複合口縁壺の口縁部である。復元口径は18.6cmである。口縁部は中程が肥厚し、直線的に立ち上がり、口縁端部をやや外側につまみ上げる。口縁屈曲部は断面三角形になり、端部がやや垂れ下がる。内外面ともに口縁部に強いヨコナデを施し、頸部はタテハケ後ヨコナデによりナデ消している。外面の頸部には一部丹塗りが確認できる。古墳時代前期前半の所産であると思われる。



第14図 SK-16出土遺物実測図(S=1/3)



第15図 表面採集遺物実測図(S=1/3)

(4) 小結

(i) 遺構の重複関係と時期

SI-01 の南半部と SB-01 は重複し、平面と土層から SB-01 が後出する。SI-10 は SD-03 に壊されることが第 7 次調査で判明しており (佐藤編 2004)、今回の調査で SB-01 (SP212) にも壊されることが判明した。

一方で、SB-01 の支柱穴である SP60・SP78・SP90 はそれぞれ SB-02・SB-03 によって一部削平され、SB-02・SB-03 が明らかに後出する。さらに SB-03 の支柱穴である SP209 は SB-02 の支柱穴である、SP53 に壊されるため SB-02 が SB-03 に後出する。また SI-01 と SI-10 の先後関係は、SI-01 出土遺物と SI-10 出土遺物の特徴が類似するため、両遺構は同時期の可能性が高い。以上の事から、今回検出された建物遺構の時期関係を整理すると、時期の古いものから SI-01、SI-10 → SB-01 → SB-03 → SB-02 となる。

(ii) 大型掘立柱建物 (SB-01) について

柱穴の形状

支柱穴は長径 1.5~2.3m、短径 0.8~0.9m、最大深 0.6m 程の楕円形状の掘方をもつ。掘方の底部に残る柱痕跡はいずれも建物側に寄り、建物の外側はスロープ状の断面形を呈する。遺構平面及び土層の堆積状況より、このスロープ部は柱設置用に掘られたものとする。また、西側の支柱穴はいずれも建物側に突出部があり、床を支えるための際東が置かれた可能性が考えられる。

方形区画 (SD-03) との関係とその他の関連遺構

SB-01 は SD-03 の中央部西側に寄せて建ち、主軸の方位が概ね一致する。また、SB-01 の出土遺物から、SB-01 は古墳時代前期前半頃に築造され、前期中葉には廃絶したと考えられる。これまでの調査により SD-03 は古墳時代前期前半の遺構と判明しているため、SB-01 及び SD-03 は同時期の遺構の可能性が高い。現状では SD-03 の東半部からは同時期の掘立柱建物や竪穴建物は未確認のため、広場の様な祭祀的な空間に使用されたと推察される。

なお、SP85 東の SP75 は、SB-01 と同様の埋土であることは前章で述べたとおりである。平面検出のみのため詳細は不明だが、仮に建物の開口部を東側とすると、階段状の昇降施設あるいは旗竿の様な祭祀施設があった可能性も考慮する必要がある。しかし今年度調査では遺構保存のため掘り下げは行わなかった。然るべき時期に再検討を行いたい。

また、調査区北西端の SB-01 と同様の埋土を持つ SP119 も看過できない遺構である。SB-01 西側柱筋軸のほぼ北延長線上にあり、SB-01 の北側にもう 1 棟建物があった可能性もある。未調査地点のため、この点も今後の課題である。(甲斐)

註釈

※ 1 SK13、SK14、SK15 は今回の調査で柱穴であることが確認された。そのため遺構番号も「SP」に変更する必要があるが、ここでは前回報告 (佐藤編 2004) の番号を踏襲し、次年度以降に作成予定の総括報告書にて遺構番号の再整理を行う。

※ 2 玉田芳英氏、箱崎和久氏のご教示による。

※ 3 久住猛雄氏のご教示による。

※ 4 SI-10、SI-02 については過年度調査では SH の番号を用いているが、『発掘調査のてびき 整理・報告書編』(文化庁文化財部記念物課編 2010) の遺構番号に従い、SI に変更した。

5. 総括

(1) 小部遺跡の古墳時代前期の遺構と遺物

(i) 環濠 SD-01、布掘溝(柵)SD-02

環濠 SD-01 は 3 区・6a 区・7b 区・7c 区・8a 区・8c 区・9a 区・9b 区・10a 区・11 区・13b 区で検出した古墳時代前期の溝である。近現代の開発等により東側が削平されているが、南北約 120m・東西 100m 以上で、南側に 2 か所の突出部があることが判明している。溝は上端幅 1~2.5m・深さ 0.4~0.9m で、断面形は逆台形あるいは V 字状である。7c 区では無遺物層の第 2 層を境に、第 1 層からは古墳時代前期前半、第 3 層からは古墳時代前期初頭の古式土師器が出土しており、2 つの時期に渡って環濠が使用されたことが分かる。

環濠 SD-01 の内側に 2 m 程の間隔で並行する布掘溝 SD-02^{*1} は 3 区・6a 区・7b 区・10a 区・11 区で検出した。3 区では上端幅 0.6~0.8m、深さ 0.1~0.2m で、底面には直径 0.2m 程の小穴が部分的に並ぶ。溝の内側に並行する柵と考えられる。

(ii) 環濠 SD-01 内部の竪穴建物

環濠 SD-01 の内側で検出した古墳時代前期の竪穴建物は SH-03・SI-10・SH-11・SH-12・SI-01 の 5 棟である。各竪穴建物の規模は第 2 表のとおりだが、深さが 0.1~0.3m と非常に浅い。環濠 SD-01 の内部は、後世の削平により数十 cm 程度は地表面が下がっていることが伺える。

遺構の重複関係から、SH-11 が SH-12 よりも後出し、後述する方形区画 SD-03 と大型掘立柱建物 SB-01 が SH-10 より後出することが確認された。また、SI-01 は大型掘立柱建物 SB-01 と重複しており、大型掘立柱建物 SB-01 が後出する。

第 2 表 環濠 SD-01 内で検出した竪穴建物一覧

遺構名	調査区	東西(m)	南北(m)	深さ(m)	柱穴数	備考
SH-03	2b 区	-	-	0.2	4?	
SI-10	7a 区	5.5	5	0.2	4	SD-03、SB-01 より先行。旧 SH-10
SH-11	11 区	6.4	5.6	0.2	4	SH-12 より後出
SH-12	11 区	-	5.2	0.3	-	SH-11 より先行
SI-01	19 次	4	4.8	0.1	4	SB-01 より先行

(iii) 方形区画 SD-03

7a 区・9c 区・12 区・13a 区・14a 区・14c 区・15a 区・16 区で検出した方形区画 SD-03 は、環濠 SD-01 のほぼ中央に位置する。東西 37m、南北 50m の長方形で、主軸は N5~6° E である。幅 0.2~0.3m、深さ 0.1~0.3m の布掘溝の底面に、直径 0.1~0.2m の小穴が連続的に並び、柵と考えられる。

(iv) 大型掘立柱建物 SB-01

方形区画 SB-03 の西辺から約 1.5m 東にある大型掘立柱建物である。14a 区で柱穴の一部を検出し、掘立柱建物の可能性が指摘されていたが、今回の調査で全ての柱穴を検出し規模等が判明した。桁行 4 間 (8.05m)、梁行 3 間 (5.6m)、平面積 45.08㎡、主軸は N5~6° E で方形区画 SD-03 の長辺と平行する。各柱筋の交点に束柱が配される総束柱建物である。

側柱は長径 1.5~2.3m、短径 0.8~0.9m、最大深 0.6m 程度で、建物の外側に向かってスロープ状に浅くなる 2 段堀の掘方である。竪穴建物と同様に遺構周辺は後世に削平されており、実際の柱穴は 1 m 近い深さがあつたと推察される。柱根底痕跡から柱材の直径は 0.2~0.3m 程で、掘方の建物側に寄る。柱の抜取が行われており、上層出土遺物から古墳時代前期後半には少なくとも建物自体が廃絶したことが判明した。

束柱は長径 0.25~0.5m、短径 0.2~0.4m、深さ 0.2~0.4m の掘方である。アタリ痕跡から分かる柱材は直径 0.15m 程度で側柱よりも明らかに細く、床束と考えられる。

建物の上部構造は専門的な見地を踏まえた検討を必要とし、今後の課題である。しかし、側柱掘方からはスロープ部に沿わせる必要がある程の長大な柱であつたと推察される。また、床を支える床束

であれば、梁は側柱のみで支えたと考えられる。上記のとおり梁行 5.4m であり、梁にも長大な木材を使用していた可能性が高い。

(v) 方形周溝墓

遺跡のある段丘東端部で方形周溝墓が 3 基確認された。2c 区で検出した ST-01 は 1 辺約 13m の正方形で、幅約 1.1~2m の溝によって区画される。1 号主体部は箱式石棺で、石棺外から鉄斧や刀子が出土した。周溝から出土した長頸壺等から古墳時代前期後半に位置づけられ、環濠 SD-01 が使用されなくなった後に墓域へと変化したと推察される。

(vi) 遺跡出土の外来系土器 (第 16 図)

小部遺跡からは多数の古式土師器が出土した。北部九州の古式土師器編年と各地域の併行関係を検討した久住猛雄氏 (久住 1999、ほか) や檀佳克氏 (檀 2011) の論考では、製作技法に基づき在来系と外来系を区別する重要性が提示された。本来であれば、小部遺跡の土器についても詳細な検討が必要であるが、紙面等の都合もあるため外来系土器を提示する。

第 15 図 1 は小部遺跡発掘の契機となった吉備系土器である。口縁部に 7 条の櫛描沈線があり、やや肩の張る胴部をもつ小型の甕である。

2 と 3 は竪穴建物 SH-08 から出土した。2 は畿内系^{*2}器台で、口縁部がやや下垂し、脚部はやや内弯気味に開く。脚部の四方に穿孔がある。3 は製塩土器である。脚部のみのため詳細は不明だが、備讃地域や瀬戸内地域で多くみられる器種に似る。

4 は竪穴建物 SI-10 出土の畿内系低脚高坏脚部である。脚部には上下二段の穿孔がある。

5~8 は環濠 SD-01 の第 3 層から出土した。5 は器壁が薄く口縁端部をつまみ上げ、球形の胴部で丸底であり、いわゆる布留系土器でも古い要素をもつ甕である。6 は口縁部が外反し、倒卵形の胴部と尖り気味の底部をもつ甕である。胴部の形態等には庄内系土器の影響があるが、頸部の屈曲が弱く、在来系土器との折衷的な土器ともいえる。7 は高坏の脚中位で強く屈曲する低脚高坏の脚部である。8 は口縁部に櫛描波状文を施し、下部で強く屈曲する高坏の坏部である。これらの土器はいずれも畿内からの影響を受けた土器と考えられる。

9 は今回の調査で掘立柱建物 SB-02 の柱穴 SP54 から出土した手焙形土器の覆部である。出土状況から竪穴建物 SI-01 から混入した可能性が高い。口縁端部には櫛描波状文の上から竹管状工具による刺突文を施す。

10~14 は環濠 SD-01 第 1 層から出土した。10 は吉備系の甕で口縁部に 5 状の櫛描沈線を施す。11 は下部で強く屈曲する畿内系高坏の坏部である。12 は器台で、口縁端部をつまみあげ、脚部は直線的に開く。13 は甕である。5 と比較すると頸部の屈曲が強く、胴部最大径が下がっている。14 は大型の壺で、口縁部が大きく立ち上がっており、山陰系土器に似る。

15 は竪穴建物 SH-04 出土の複合口縁壺である。複合口縁の接合部は断面三角形に垂れ下がり、竹管状工具による刺突を伴う円形浮文が巡る。

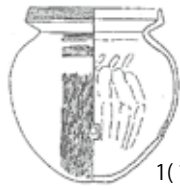
16 は SH-11 から出土した甕である。口縁部がやや外弯し、屈曲の強い頸部と倒卵形の胴部といった特徴は庄内系土器にも似る。

17 は大型掘立柱建物 SB-01 の柱穴 SP90 から出土した甕の口縁部である。口縁部の中程をやや肥厚させ、頸部は強いナデにより稜ができるといった点で、前期後半の布留系土器の特徴をもつ。第 3 章で述べたとおり、SP90 で柱の抜取が行われた後の埋土から出土しており、大型掘立柱建物 SB-01 が完全に廃絶した時期を示している可能性が高い。

18・19 は方形周溝墓 ST-01 の周溝から出土した畿内系複合口縁壺である。18 は外反する比較的短い複合口縁であり、接合部は垂れ下がる。19 は外反する複合口縁部と直立する頸部をもつ。

II a期 (古墳時代前期初頭)

調査区外



1(吉備系)

SH-08

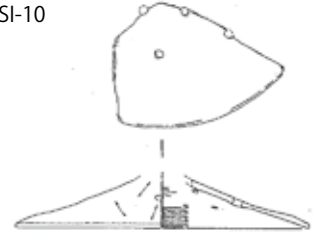


2(畿内系)



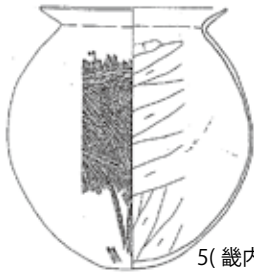
3(瀬戸内系?)

SI-10



4(畿内系)

SD-01(第3層)



5(畿内系)



6(畿内系?)



7(畿内系)



8(畿内系)

SB-02

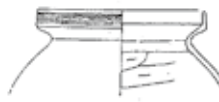
※ SI-01 からの混入か?



9(畿内系?)

II b期 (古墳時代前期前半)

SD-01(第1層)



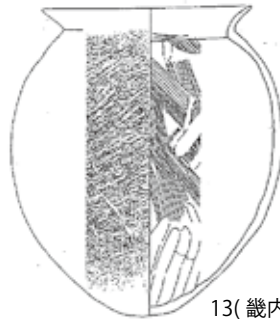
10(吉備系)



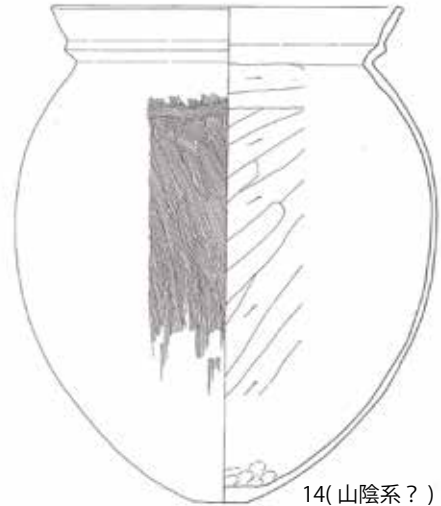
12(畿内系)



11(畿内系)

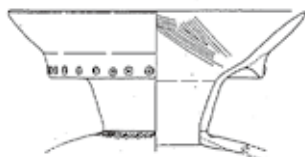


13(畿内系)



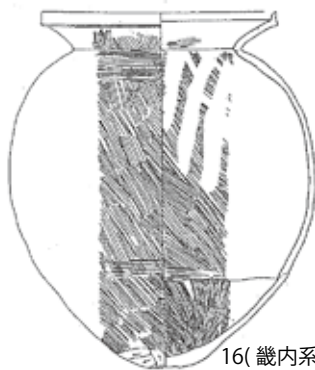
14(山陰系?)

SH-02



15(畿内系)

SH-11



16(畿内系?)

0 20cm

III期 (古墳時代前期後半 ~ 中期初頭)

SB-01



17(畿内系?)

ST-01



18(畿内系)



19(畿内系)

第 16 図 小部遺跡から出土した外来系土器 (S=1/6)

(2) 小部遺跡における遺構の時期別変遷

過去の調査成果と今回の成果を踏まえて、小部遺跡の変遷を概観する(第17図)。時期区分は前回報告(佐藤編2004)を踏襲し、下記の様に設定する。

既往の調査結果では、小部遺跡で発見される遺構はI期(3世紀前半)が最古となる。ただし、現状では土坑3基(SK-03、SK-07、SK-09)しか確認されず、本格的な集落は営まれていなかった可能性が高い。

II a期(3世紀中頃)になると、遺跡がある黒川左岸の低位段丘上に環濠SD-01が掘削される。環濠SD-01は近代の圃場整備等に伴って東側が削平されているが、南北約120m・東西100m以上の規模で、南側に2か所の突出部が付設されたことが判明している。隅丸形状で2か所の方形突出部があるといった点で弥生時代の環濠とは形態が異なっており^{*3}、「弥生時代の環濠集落の形態を残しつつ、古墳時代の定型化した豪族居館の特徴をも有している」と前回報告でも述べる。環濠の内側に平行する様に掘られた布掘溝SD-02が設置される。布掘溝SD-02は出土遺物が少なく厳密な時期比定は難しいが、環濠SD-01との間隔は約2mと一定であり、同時期に掘削された可能性が高い。なお、布掘溝SD-02の底面からは部分的に小穴が検出されており、柵であったと考えられる。

竪穴建物は環濠内に4棟、環濠外に1棟が確認されている。なお、環濠内の竪穴建物(SI-10、SI-01、ほか)は支柱穴4本であるのに対して、環濠外の建物(SH-08)は支柱穴2本であり、環濠内外で建物の構造に若干の差異が認められる。

II b期(3世紀後半～末)には、環濠の内側に方形区画SD-03と大型掘立柱建物SB-01が設けられたことで、外郭と内郭をもつ集落に変化する。竪穴建物としてはSH-11のみが環濠内にあり、それ以外の竪穴建物(SH-04、SH-07)は環濠の外に築かれている。環濠内の竪穴建物は支柱穴4本、環濠外では支柱穴2本という構造上の差異があるのは、II a期と共通する。

この時期に新たに築かれた方形区画SD-03の内部において、同時期の遺構は現状では大型掘立柱建物SB-01のみしか検出されておらず、環濠内において特別な空間であったことが推察される。さらにいえば、大型掘立柱建物SB-01は方形区画SD-03の西辺に接するように建てられており、区画の東側に広場のような空間が創り出されていた可能性がある。

III期(4世紀前半～5世紀)になると、大型掘立柱建物・方形区画・環濠はいずれも廃絶し、竪穴建物も築かれない。一方で、段丘東側の縁辺に連続的に方形周溝墓(ST-01ほか)が築かれており、II b期に集落が廃絶した後に、この地が墓域に変化したと推察される。なお、遺構としては未確認だが、5世紀代の埴輪がST-02周辺の表土から出土した。墓域は古墳時代中期まで利用された可能性が高い。

墓域となった後、一旦この遺跡は完全に廃絶し、その後、IV期(7世紀初頭)に再び集落として短期間利用されたことが過年度調査により判明した。

今回検出した掘立柱建物SB-02からは、奈良時代(V期=8世紀後半)の須恵器等が出土した。SB-02の一部はSB-03と重複しており、SB-03の先行が確認された。SB-03からの出土遺物は小片のみであり時期比定は困難だが、2つの建物の主軸は概ね一致するため、比較的近い時期の建物と考えられる。

第3表 小部遺跡 遺構一覧表(下線ありは環濠SD-01内で検出)

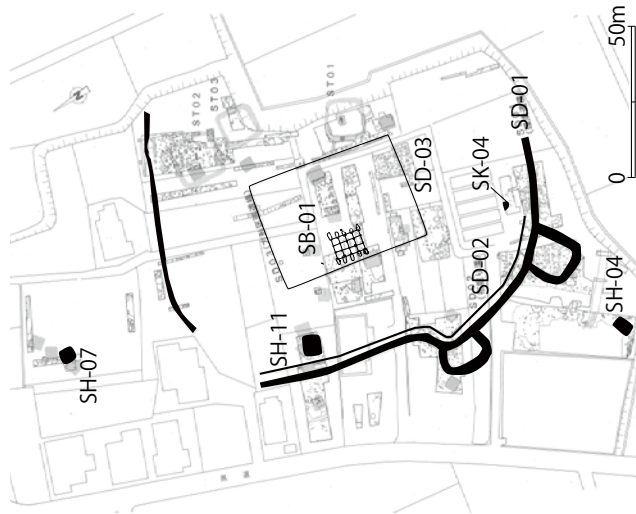
小部遺跡	時代	実年代	久住猛雄 1999、ほか	長直信 2006、ほか	今回検出した 遺構	過年度調査で検出した遺構
I期	弥生終末	3C前半	I B期			SK-03、SK-07、SK-09
II a期	古墳前期初頭	3C中頃	II A期		<u>SI-01、SI-10</u> <u>SK-16</u>	SD-01(下層)、SD-02? SH-03、SH-10、SH-12、 SK-05、SK-08、SH-08
II b期	古墳前期前半	3C後半～末	II B期		<u>SB-01、SD-03</u> <u>SP75?、SP119?</u>	SD-01(上層)、SD-02? SD-03、SH-11、SK-04、 SH-04、SH-07
III期	古墳前期後半 ～中期	4C前半 ～5C	II C期～III A期			ST-01、ST-02、ST-03
IV期	古墳終末	7C初頭		豊前IV期		SH-01、SH-09?、SH-13、 SH-14、SH-20?
V期	奈良時代	8C後半		豊前VII期	SB-02、SB-03?	



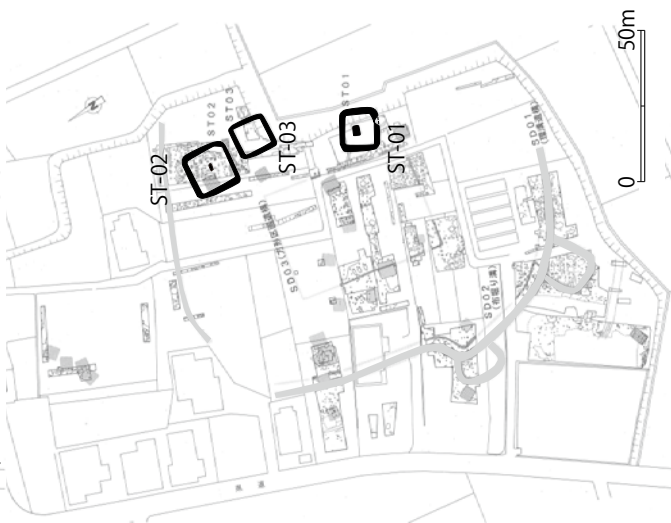
I期 (弥生時代終末期)



II a 期 (古墳時代前期初頭)



II b 期 (古墳時代前期前半)



III期 (古墳時代前期後半~中期)



IV期 (古墳時代終末期)



V期 (奈良時代)

第17図 小部遺跡遺構変遷図 (S=1/2500)

(3) 小部遺跡の集落構成

小部遺跡は弥生時代終末期から近代の複合遺跡だが、その中で最も遺跡として特徴が認められるのはⅡ a 期(古墳時代前期初頭)からⅡ b 期(同前期前半)であり、その特徴をまとめる。

Ⅱ a 期には環濠 SD-01 の内外で竪穴建物の構造等に差異が認められることから、環濠 SD-01 と布掘溝(柵)SD-02 を境に何らかの区別があったと推察できる。しかしながら、環濠内の建物に規模等の明確な差はなく、環濠内に掘立柱建物等も築かれない。特定集団に対する区別はあるが、弥生時代の集落形態を踏襲しており、階層分化は比較的ゆるやかな状態であったことが想定される。

Ⅱ b 期になると、環濠のみをもつ弥生時代的な集落から、環濠内にさらに方形区画 SD-03 をもつ集落へと変化した。方形区画 SD-03 の内部には、今回の調査で検出された大型掘立柱建物 SB-01 が少なくとも 1 棟、方形区画の西辺に隣接する位置に、方形区画と同一主軸をもって建てられていたことが判明した。

3 世紀の豊前・豊後地域の集落動態を検討した田中裕介氏の論考(田中 2009)によれば、「建設当初、突出環濠の内部は首長の居住空間と祭祀空間が未分離であったものが、後に内部に長方形区画を建設して祭祀空間を分離したもの」とする。今回発見された大型掘立柱建物 SB-01 は、環濠 SD-01(外郭)と方形区画 SD-03(内郭)という二重の区画施設に囲まれており、特定の有力者層のみが使用する施設の機能を果たしたと推察され、その背景には本格的に古墳時代に突入して階層分化が一層進んだ可能性も考えられる。

(4) 周辺の遺跡との関係(第 18 図)

第 4 表は、小部遺跡に豪族居館が築かれる前後の時期での駅館川下流域周辺の遺跡消長表である。弥生時代後期後半以降の宇佐地域では、駅館川を境として左岸を集落に、右岸を墓域とするという選択的な土地利用があったことが指摘できる。ここでは、小部遺跡で環濠 SD-01 が機能した前後の時期で周辺の遺跡と比較する。

(i) 川部遺跡^{かわべ} 南西地区墳墓群、ST33 方形周溝墓(第 19 図)

川部遺跡は駅館川^{やつかん}右岸にある標高 37m 程の台地上に所在している。弥生時代前期から中期までは比較的大きな環濠集落が営まれるが、後期以降は小規模化する。小部遺跡Ⅰ期からⅡ a 期と併行する時期に築かれた南西地区墳墓群では、南北 17m・東西 13m 以上の方形周溝の内外から箱式石棺墓や土壙墓等が 23 基発見されている。

南西墳墓群の内、小部遺跡Ⅰ期と同時期に築かれた箱式石棺墓 H2 は舶載四乳八禽鏡 1 面や鉄剣等が出土しており、周溝の中心主体部と考えられている。周溝内には H2 以外にも石棺墓 6 基・木棺墓 1 基・石蓋土坑墓 3 基があるように、墓域を共有していることから特定個人墓とは言えない。しかし、周溝外の墓とは副葬品の有無や墓の規模に明確な差異があり、周溝内の墓群が川部遺跡の指導者的集団の墓であると考えられる(江藤編 2010)。

一方、南西墳墓群から約 100m 北にあるⅡ a 期の方形周溝墓 ST33 は周溝内に 2 基の石棺墓をもつのみで、特定個人墓への変遷の途上を示す可能性が指摘されている。

(ii) 岩金遺跡^{いわがね}(第 20 図)

岩金遺跡は駅館川左岸に形成された標高 10m 程の沖積平野上にある集落遺跡で、古墳時代前期から中期中頭の竪穴建物 17 基が検出された(綿貫編 2007)。

集落の出現時期は小部遺跡と同様の時期だが、廃絶は中期中頭で小部遺跡よりも存続期間が長い。Ⅱ a 期またはⅡ b 期と併行する時期の竪穴建物からの出土遺物に、布留系土器等の外來系土器を多数含むことは小部遺跡と共通するが、同時期の溝や柵といった区画施設や掘立柱建物等は検出されていない。さらに言えば、竪穴建物の規模に差は認められず、小部遺跡とは異なる一般集落と考えられる。

(iii) 赤塚 1 号方形周溝墓(第 21 図)

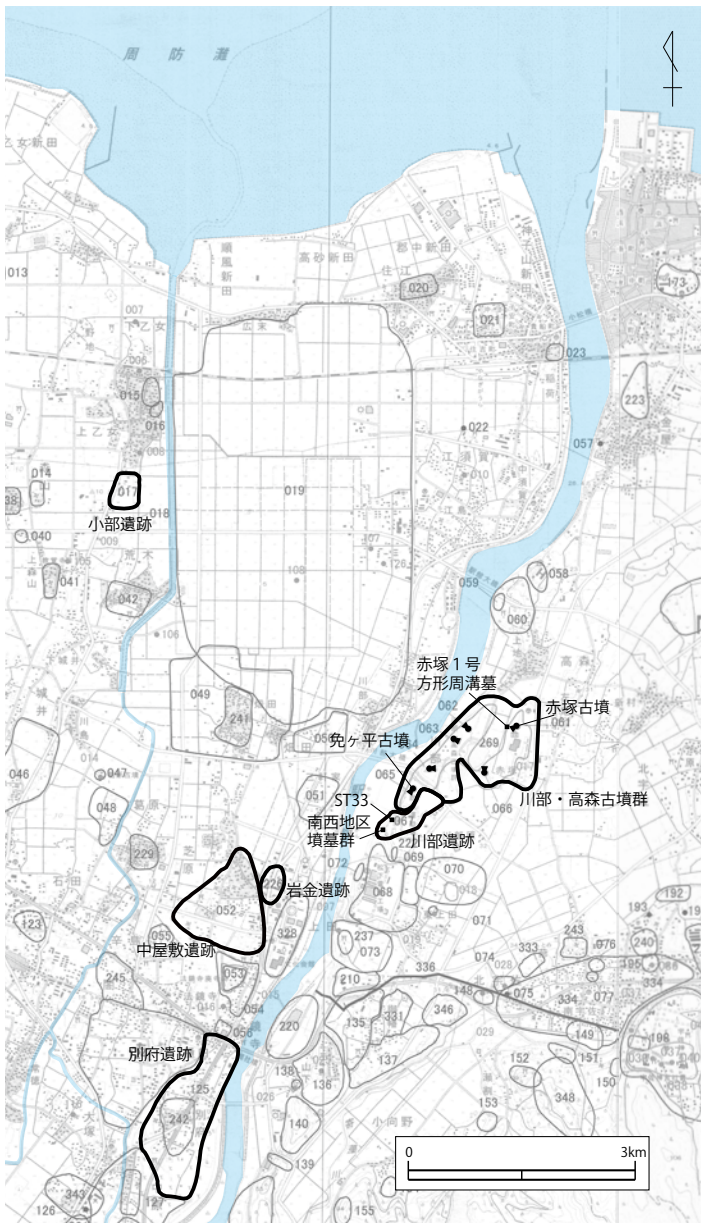
後述する赤塚古墳の西側約 70m に位置する方形周溝墓である。周溝の規模は南北約 11m、東西は西

側が削平されており不明である。周溝の中央に1基の箱式石棺が設置されており、棺内からは禽文鏡1面や小型の鉢等が出土している(高橋・綿貫編 2011)。築造はⅡa期と併行する時期と考えられており(久住 2018)、赤塚古墳に先行する。特定個人墓で独立するが、形態や構造は弥生時代の墓制と共通する。

(iv) 赤塚古墳(第21図)

赤塚古墳は川部・高森古墳群の中で最古の前方後円墳で、駅館川右岸の標高約30mの台地上にある。主体部の箱式石棺から出土した5面の舶載三角縁神獸鏡には、椿井大塚山古墳(京都府)や石塚山古墳(福岡県)との同範鏡が含まれており、畿内政権との強い関係性を持つ被葬者像が想定されている。出土遺物から、3世紀後半から末頃に築造されたと考えられている。

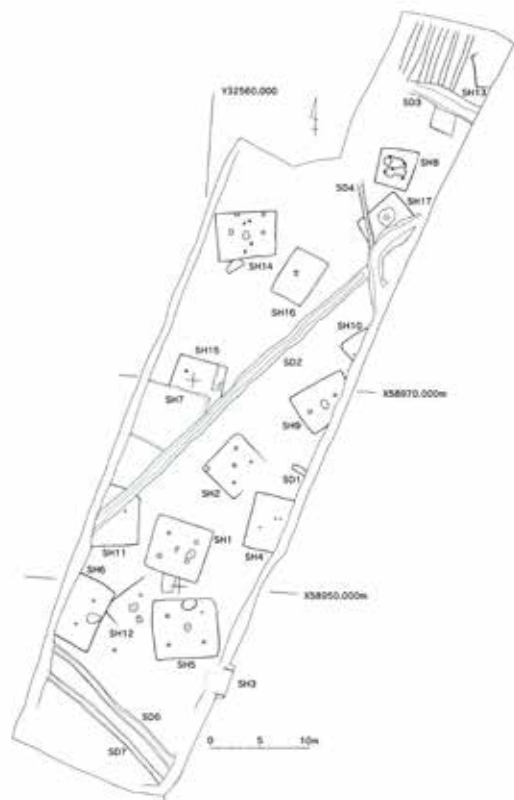
前述した川部遺跡南西地区墳墓と異なる特定個人の為の墳墓であり、なおかつ前方後円墳という特定の墓制を採用していることから、古墳時代前期前半の宇佐地域では畿内政権との結びつきが強くなるにつれて階層分化がより進んだことが伺える。



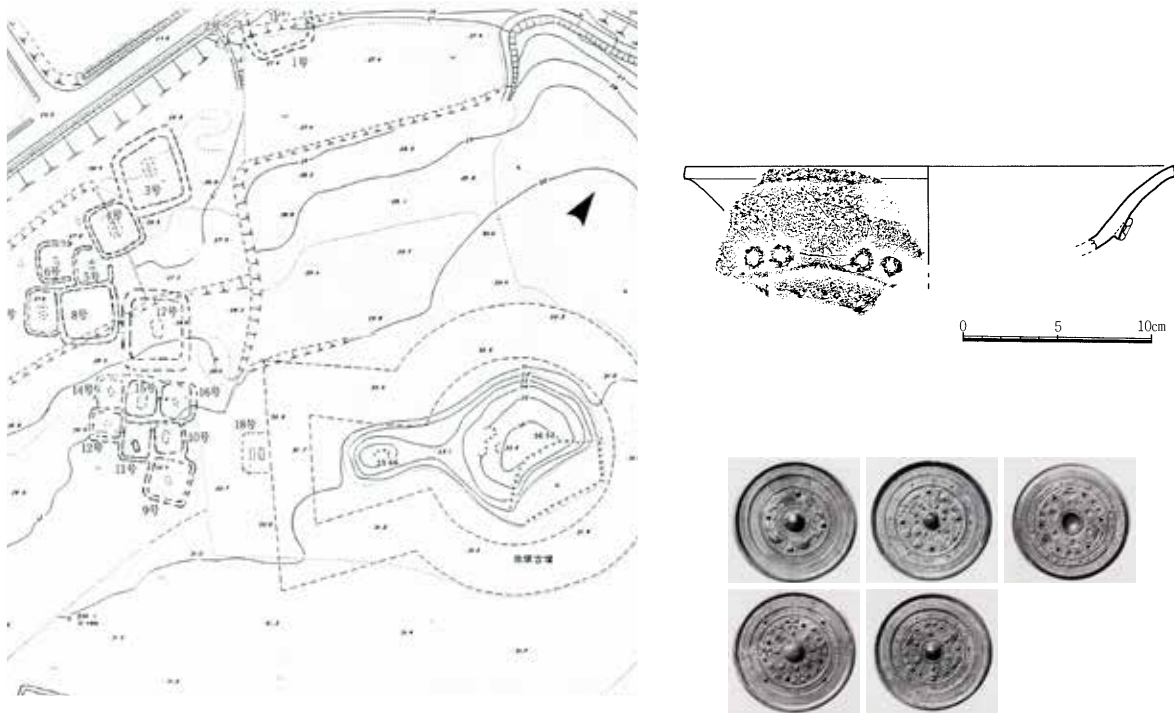
第18図 小部遺跡周辺の遺跡位置図
(大分県遺跡地図 2018年版を一部改編、S=1/40000)



第19図 川部遺跡南西地区墳墓群 平面図
(江藤編 2010より、S=1/500)



第20図 岩金遺跡遺構配置図
(高橋・綿貫編 2011より、S=1/750)



第 21 図 赤塚古墳及び周辺遺構配置図、出土遺物

(左：真野編 1979 より、S=1/1000・右上：宮内編 1981 より、S=1/4・右下：甲斐ほか 1989 より、縮尺不同)

(v) 小結 駅館川下流域における弥生時代後期後半から古墳時代中期前半の集落・墓域の動態

弥生時代後期後半 別府遺跡や中屋敷遺跡等の集落遺跡が、駅館川左岸沿いの低位段丘上に展開する。

弥生時代終末期

前述した集落遺跡が衰退する一方で、岩金遺跡で新たに集落が営まれ始める。前項で述べたとおり、この時期に小部遺跡では土坑が確認され、小規模な活動があったと考えられる。駅館川を挟んで対岸の台地上には、川部遺跡南西地区墳墓群という特定集団の墓域が形成される。川部遺跡南西地区墳墓群 H2 石棺墓からは舶載青銅鏡等が出土し副葬品に優劣が認められる一方で、周溝で囲まれた墓域を共有しており、この時期は有力者集団への権力が集中する階層分化の萌芽的段階と考えられる。

古墳時代前期初頭

岩金遺跡の集落は継続し、小部遺跡では突出部をもつ環濠 SD-01 が掘削されて集落が成立する。小部遺跡では環濠 SD-01 による区画はあるが、環濠内の竪穴建物の規模等に差はない。

墓域は、川部遺跡南西地区墳墓群は継続的に利用される一方で、川部遺跡 ST33 や赤塚 1 号方形周溝墓といった墓域を多人数で共有しない方形周溝墓が築かれた。

墓制に目を向けると集団墓とは別の場所に特定個人墓を造り、この時期に権力が集中しはじめ、階層分化は弥生時代終末期よりも進んだことが伺える。一方、集落(小部遺跡)では集団内での区別はあるが、特定個人が使用する施設という明確な区別はなく、階層分化は緩やかに進行した可能性を指摘できる。

古墳時代前期前半

岩金遺跡は集落として継続するが、竪穴建物の規模や集落構成に変化は見られない。一方で、小部遺跡では環濠 SD-01(外郭)と方形区画 SD-03(内郭)という二重の区画施設の内側に大型掘立柱建物 SB-01 が築かれ、前期初頭と比べて集落構成が大きく変化する。

この時期には、駅館川流域で最古の前方後円墳である赤塚古墳が築かれる。前述のとおり、赤塚古墳からは三角縁神獣鏡 5 面が出土し、前方後円墳という共通性の高い墓制を採用したことから、畿内政権との強い関連性が指摘されている。

集落(小部遺跡)と墳墓(赤塚古墳)の双方で特定有力者に権力が集中する様相が伺え、この時期に階層分化が一層進んだと推察される。

古墳時代前期後半

岩金遺跡では依然として集落が営まれる一方で、小部遺跡は集落が廃絶し墓域へと変化する。この時期には、免ヶ平古墳・角房古墳・車塚古墳・福勝寺古墳といった前方後円墳が連続的に築かれ、特定有力者の継続的な存在が想定されている。しかし、現状では駅館川流域の当該期の集落遺跡は岩金遺跡のみしかなく、有力者層の居館は不明である。

古墳時代中期初頭

岩金遺跡では当該期以降の竪穴建物は確認されず、集落はこの時期で廃絶したと考えられる。小部遺跡では方形周溝墓が築かれる。川部・高森古墳群でも、前方後円墳はこの時期には築造されなかったと考えられている(田中 2010)。

古墳時代中期

中屋敷遺跡でこの時期の竪穴建物等が検出され、集落が移動したことが推察できる。中期初頭に引き続き、前方後円墳等の首長墓は造られず、小規模な方墳が川部遺跡で築かれる。小部遺跡では遺構は未確認だが、出土した埴輪からこの時期まで小規模な墳墓が築かれた後、古墳時代終末期に再度集落となるまで一旦は完全に廃絶する。

第4表 駅館川下流域における弥生時代後期後半から古墳時代中期の遺跡消長

立地	駅館川左岸						駅館川右岸				
	小部遺跡		岩金遺跡	中屋敷遺跡		別府遺跡	川部遺跡(南西地区)	川部遺跡(ST33)	赤塚1号方形周溝墓	赤塚古墳	免ヶ平古墳
遺跡の性格	時期	集落	墓	集落	集落	集落	墓	墓	墓	前方後円墳	前方後円墳
弥生時代後期後半											
弥生時代終末	I期										
古墳時代前期初頭	II a期	■		■			■	■	■		
古墳時代前期前半	II b期	■		■						■	
古墳時代前期後半	III期										■
古墳時代中期初頭											
古墳時代中期											

(5) 全国の同時期集落との比較

(i) 突出部のある環濠をもつ拠点集落

小部遺跡の環濠 SD-01 は弥生時代的な特徴と古墳時代的な特徴を併せ持つ遺構であることは前述した。ここでは、小部遺跡で本格的に集落が成立した前後の時期で突出部^{*4}のある環濠を有し、拠点集落と推定される遺跡と比較し共通点と相違点を整理する。なお、時期比定と遺構の呼称については各報告書等に準じる。

吉野ヶ里遺跡(佐賀県神埼郡吉野ヶ里町、第22図)

弥生時代後期後半に全長1kmを超す大規模な外環濠が完成し、外環濠の内側には隅丸形状で突出部のある南内郭や集落への出入口と考えられる構えの濠が成立する。続く弥生時代後期終末期になると、南内郭と構えの濠は掘り直され、平面形がA字状の2重環濠で囲まれた北内郭が築かれる。北内郭内側の環濠 SD1122 は4か所の突出部をもつ。突出部ごとに物見櫓と思われる桁行2間・梁行1間の掘立柱建物があり、環濠の内側には柵が張り巡らされる。北内郭内部には、桁行3間(12.7m)、梁行3間(12.3m)で総柱構造の

大型掘立柱建物 SB1194 の他に、数棟の掘立柱建物と 1 棟の竪穴建物があったと考えられる。外環濠をはじめとする環濠は古墳時代初頭には埋没し、南内郭と構えの濠があった場所は前方後方墳 4 基を含む墓域に変化する。その後、古墳時代前期前半になると集落も廃絶を迎える (渋谷編 2015)。

環濠に平行して柵が巡る点や、集落の廃絶後に墓域に変化する点、環濠で区画された空間内に総柱の大型掘立柱建物が建つ点等は小部遺跡と共通する。一方、北内郭、南内郭のいずれも方形区画は築かれない。前述のとおり北内郭が成立するのは弥生時代終末期であり、小部遺跡よりも古い。また、大型掘立柱建物 SB1194 は、本遺跡の大型掘立柱建物 SB-01 の 3.5 倍近い平面積であり、規模は大きく異なる。

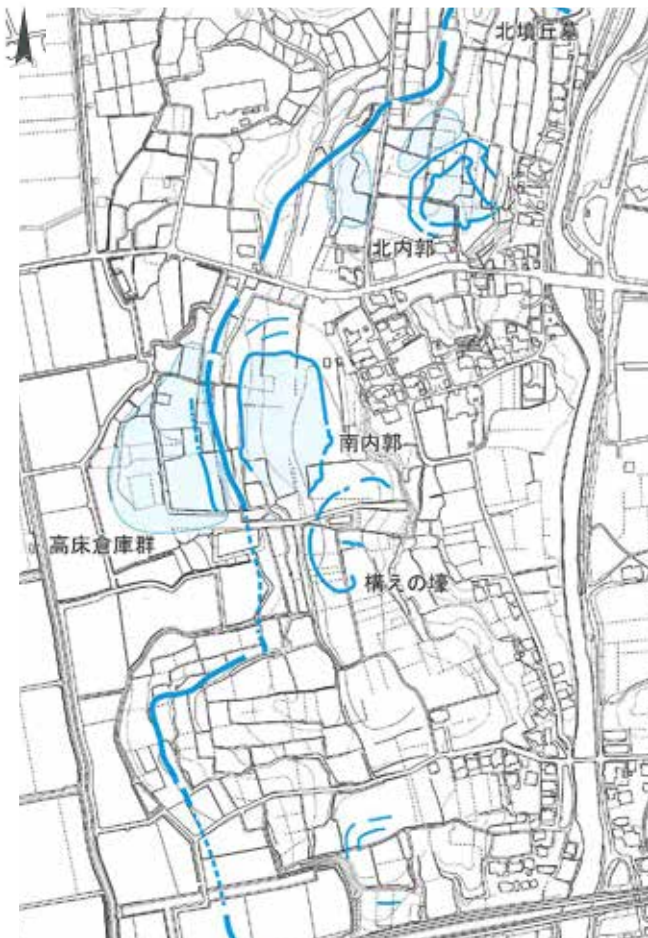
おざこつじばる
小迫辻原遺跡 (大分県日田市、第 23 図)

弥生時代後期後半から古墳時代前期前半の豪族居館とされる。弥生後期後半に遺跡の北側で突出部をもつ 1 号環濠、続く終末期に 2 号環濠が連続的に掘削された。

古墳時代前期初頭には隅丸方形形状の 3 号環濠を掘削する。この時期は、環濠の他に遺跡を南北に縦断する 1 号条溝が掘られ、条溝の西側に 1 号方形環濠建物が築かれる。1 号方形環濠建物は 1 辺約 47m、溝幅約 3.5m の方形環濠の内部に、平行する布掘溝と南北 2 間 (6.3m) 以上・東西 3 間 (6.5m)、平面積 40.95㎡の掘立柱建物を築く。建物内部には東柱と思われる柱穴が 2 基あり、高床の建物であった可能性が高い (田中編 1999)。続く古墳時代前期前半には、1 号条溝を境として 2 つの方形環濠建物が築かれる。2 号方形環濠建物は 1 辺約 36m 四方で、溝の内部から柵と思われる布掘溝と、2 基の掘立柱建物が検出された。掘立柱建物は東西 3 間 (6.5m)・南北 2 間 (5.3m)、平面積 34.45㎡の同一規模の建物で、区画の西側に偏って建てられており、造営時の計画的な配置が想定される (渡邊編 2011)。

方形環濠 (区画) の内側に築かれた掘立柱建物は区画の西側に偏って建てられた点や、集落の廃絶時期などは小部遺跡と共通する。

一方、方形区画と環濠が離れた位置に築かれ、環濠 SD-01 の内側に方形区画が築かれる小部遺跡とは様相が異なる。また、日田地域では豪族居館と同時期の前方後円墳等の首長墓が未確認である点も小部遺跡とは異なる。



第 22 図 吉野ヶ里遺跡 弥生時代終末期の集落配置・北内郭平面図
(渋谷編 2015 より、左：S=1/7500、右：S=1/2000)

しとまき
四斗蒔遺跡 (栃木県さくら市、第 24 図)

古墳時代前期の居館と考えられる方形の溝が 2 基確認された。1 号遺構は南北約 47m・東西約 41m・溝幅 3~5m 程の濠の南北にそれぞれ 1 か所の突出部が造られており、内側には平行する柵列が巡る。柵の内部は東西に延びる柵によって二分割される。区画の北側には桁行 4 間 (7.1m)・梁行 2 間 (4.2m) で棟持柱をもつ 1 号掘立柱建物 (平面積約 28㎡) と、南北 7.4m・東西 8m の 1 号竪穴建物が築かれる一方、南側には小規模な竪穴建物が左右対称に 4 基築かれる。2 号遺構は南北約 50m で西側の一部を 1 号遺構と共有するが、内部の調査が行われておらず詳細は不明である (橋本 1996)。

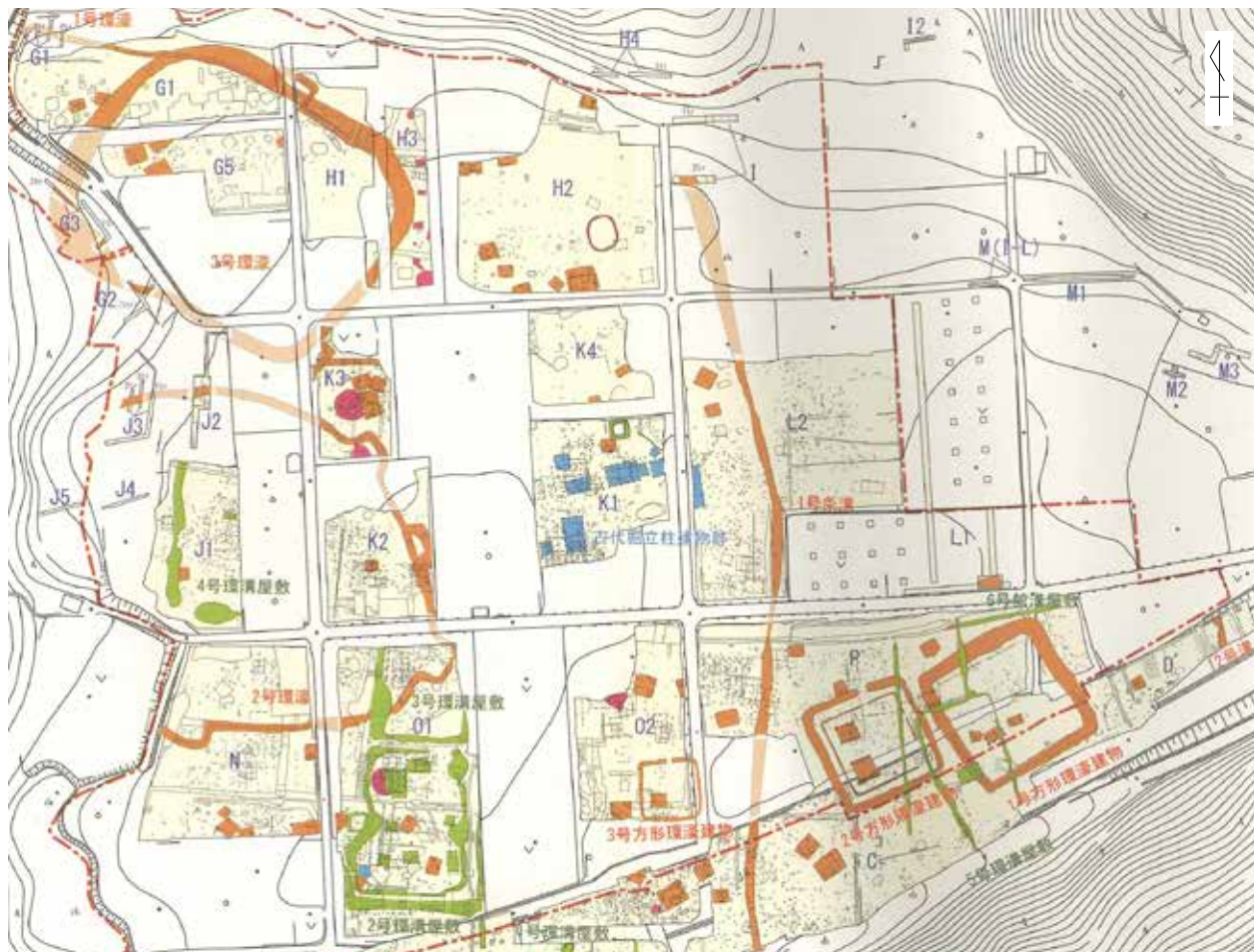
突出部をもつ環濠の内側に方形区画や大型建物を築く点は小部遺跡と共通する。また、遺跡から約 400m 北西にある、お旗塚古墳が居館に対応する墳墓と考えられ、居館と墓域の関係も推定されている。

一方で、環濠の規模は大きく異なり、四斗蒔遺跡の居館は全体面積で 1,800㎡程度だが、小部遺跡では方形区画 (SD-03) 内部のみで 1,850㎡、環濠 (SD-01) を含めると 12,000㎡を超える。

にしおかだい
西岡台遺跡 (熊本県宇土市、第 25 図)

古墳時代前期後半から中期前半の集落遺跡である。居館は南北約 100m・東西約 89m で、南側に 2 か所の突出部が造られているが、環濠の内部は中世に築造された宇土城の普請等により削平されており、集落の具体的な様相は不明である (藤本編 2012)。

宇土半島基部は古墳時代前期の前方後円墳が多数築かれた地域で、首長の墳墓と居館の関係が想定される事例では小部遺跡と共通する (武末 2000)。一方で、小部遺跡に対応する時期の前方後円墳は赤塚古墳のみであるが、西岡台遺跡では 3 世紀末から 5 世紀前半まで継続的に居館が使用されたと考えられおり、様相が異なる。



第 23 図 小迫辻原遺跡 遺構配置図 (渡邊編 2011 より、S=1/2500)

入の沢遺跡 (宮城県仙台市、第 26 図)

古墳時代前期後半の集落遺跡で、総長 330m 程度の不整形の大溝、溝に沿った材木堀、盛土遺構の内側に 40 基近い竪穴建物を築く。竪穴建物 (SI13) からは銅鏡 2 面や鉄製品、玉類、石製垂飾類等の威信財を含む多数の遺物が出土し、倉庫に使用された可能性が指摘された。しかし、建物の規模や外観の構造では「他の竪穴建物跡と優劣や相違を判断する根拠は認められない」と報告された (村上・高橋編 2016)。

溝の内側に平行する柵を築く構造は小部遺跡と共通する一方で、大型建物や方形区画といった構造が大きく異なる施設は築かれない。また、宮城県は前方後円墳をはじめとする古墳の北限域で、集落と対応する首長墓は不明である。

(ii) 方形区画内に建物を有する集落

古墳時代の豪族居館は、「濠・柵などの外郭施設に守られ、あるいは区画され方形を基調とした平面形をもつ敷地内に、大型の建物や祭祀遺構を配置し、時には内部で手工業生産活動を伴う、有力者の居住の場、兼地域支配の拠点」との定義もある (橋本 2018)。この定義に基づけば、II b 期の小部遺跡では手工業生産活動以外の要素は揃っており、豪族居館の位置付けができる。

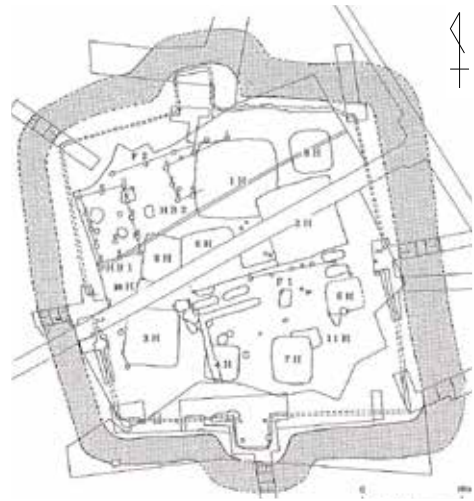
今回検出した大型掘立柱建物 SB-01 は桁行 4 間 (8.05m)・梁行 3 間 (5.6m)、平面積 45.08㎡の規模である。宮本長二郎氏の検討で、掘立柱建物は平面積 40㎡以上 100㎡未満を、竪穴建物は 50㎡以上を大型建物として扱うことが提唱されている (宮本 1996)。

前項で検討した 4 つの遺跡の中で、方形区画と掘立柱建物が共に検出されたのは、小迫辻原遺跡と四斗蒔遺跡のみである。比較対象が少ないため、新たに 3 つの遺跡を例に挙げて比較を行う。

小迫辻原遺跡

小迫辻原遺跡

1 号方形環濠建物が束柱をもつ高床建物である点や、掘立柱建物が方形区画の西側に偏って建つ点は小部遺跡と共通する。一方、1 号方形環濠建物は平面積約 40㎡、2 号方形環濠建物は平面積 35㎡程で、い



第 24 図 四斗蒔遺跡 1 号遺構平面図 (橋本編 2000 より、S=1/750)



第 25 図 西岡台遺跡 環濠平面図 (藤本編 2012 より、S=1/2000)



第 26 図 入の沢遺跡 遺構配置図 (村上・高橋編 2016 より、S=1/2000)

れも SB-01 の規模を下回る。なお、小迫辻原遺跡の方形区画は 3 基すべてが平面形は正方形に近く、区画自体を幅 1 m から 3.5m 程の溝で築くのに対して、小部遺跡の方形区画 SD-03 は前述のとおり南北約 50m、東西約 37m の長方形プランの柵であった可能性が高く、方形区画の構造等にも差異がある。

四斗蒔遺跡

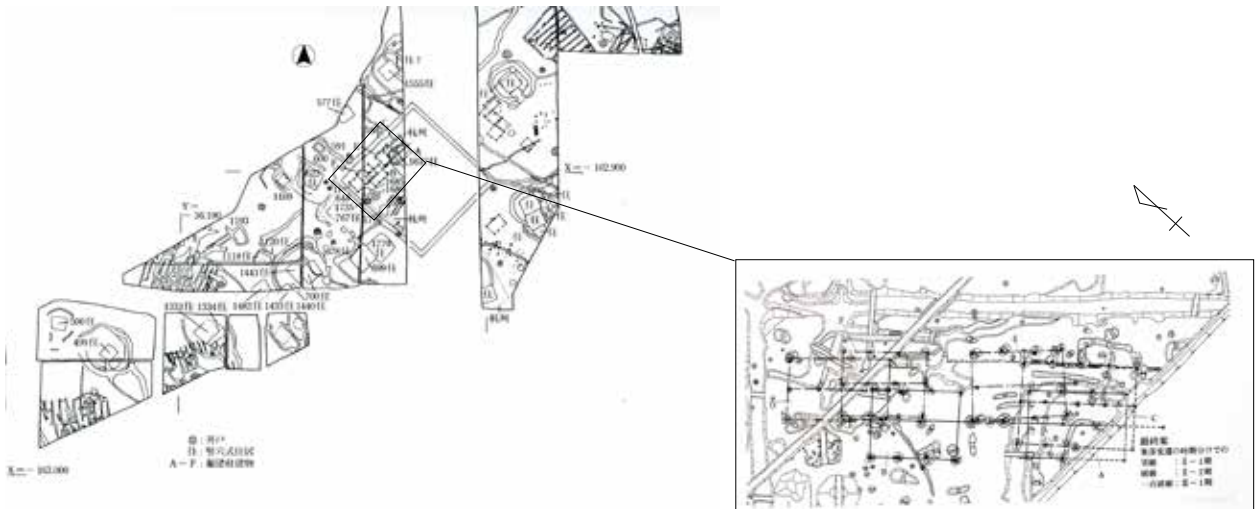
1 号竪穴建物は南北 7.4m・東西 8 m 程で、平面積は約 52㎡となる。平面積だけで比較すると小部遺跡 SB-01 よりもやや大きい、古墳時代の掘立柱建物は「規模は竪穴住居よりも小さくとも、建築様式の上で竪穴住居よりも格式が高かった」(宮本前掲)との指摘もある。なお、隣接する掘立柱建物の面積は約 28㎡と小型である。大型竪穴建物と掘立柱建物はいずれも 1 号遺構の北半にあり、掘立柱建物は北西側に寄る。

尺度遺跡 (大阪府羽曳野市、第 27 図)

古墳時代前期初頭から前期前半の大規模な集落である。1 辺 37m 前後と考えられた正方形の区画溝内部の北西辺に偏った位置で、6 基の掘立柱建物が確認された。遺構の重複関係から、2 基の並立する掘立柱建物を 2 回建替えたことが判明した。6 基の中で最大規模である建物 C は桁行 4 間 (7.5m)・梁行 2 間 (5.4m)・平面積 40.5㎡であるが、それ以外の建物は桁行 3 間・梁行 2 間で平面積はいずれも 30㎡に満たない。

掘立柱建物が方形区画の一辺に偏って建つ状況は小部遺跡と共通する。

一方で、尺度遺跡の方形区画は正形状の溝なのに対して、小部遺跡とは方形区画の構造や平面形が大きく異なる。また、方形区画内で掘立柱建物が建て替えられ、比較的長期の区画使用も小部遺跡とは状況が異なる。



第 27 図 尺度遺跡 遺構配置図・区画内の掘立柱建物変遷図 (三宮編 1999 より、左：S=1/2500、右：S=1/400)

菅原東遺跡 (奈良県奈良市、第 28 図)

古墳時代前期後半期の豪族居館と推定される遺跡である。東西方向に延びる溝 SD24(外郭)と方形区画溝 SX22(内郭)が確認された。方形区画溝 SX22 は溝幅約 6 m で 50m 四方の正方形に近い平面形が想定され、内部から掘立柱建物が検出された。掘立柱建物の規模は未報告であるが、遺構配置からは南西側に偏る。

方形区画の西側に建物が寄る状況は共通するが、上記の 3 遺跡と同様、方形区画が正形状の溝であり、小部遺跡の方形区画 SD-03 とは異なる。

万行遺跡 (石川県七尾市、第 29 図)

古墳時代前期初頭から前期前半にかけて幅 0.3m 程、断面箱型で底面に小穴が部分的に並ぶ二重の素掘溝で南北 74m、東西 39m 以上の方形区画 (SD01・SD02・SD03・SD04) が築かれる。方形区画内部では、

6棟の超大型掘立柱建物が確認された。方形区画の東西に3棟ずつの総柱建物が南北の柱筋を揃えて並び、西群から東群へという建て替えが行われたと考えられる。東群の時期には西側が広場として利用され、西群の時期には東側が広場として利用された可能性が高い。

東群には桁行4間、梁行4間のSB05の南北に、桁行4間、梁行3間のSB04とSB06が建つ。建物の平面積はSB04が229.68㎡、SB05が282.15㎡、SB06が202.95㎡で、いずれも建物西側に下屋状施設が付属する。大型掘立柱建物群が廃絶した後、古墳時代前期後半には南北22.2m、東西22.8mの方形区画SD07が新たに築かれる(善端編2003)。

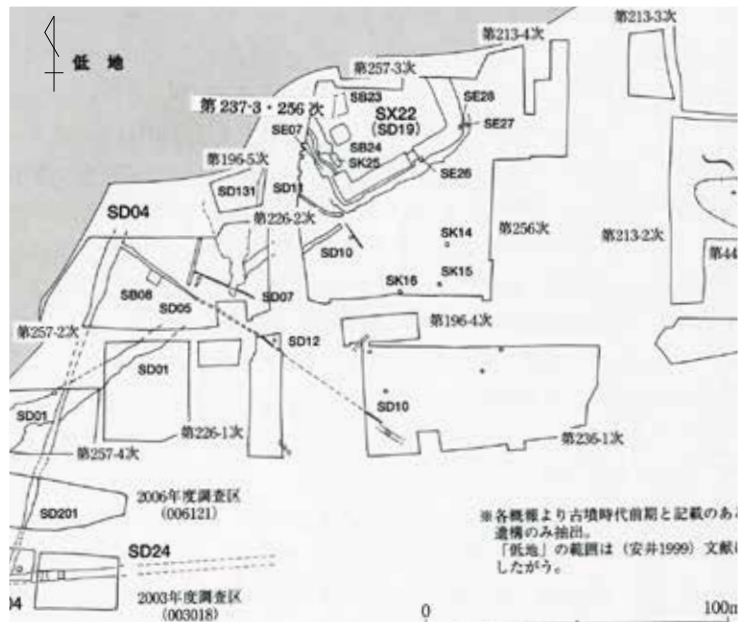
幅が狭く底面に小穴が並ぶ溝で長方形に区画する点や、掘立柱建物が方形区画の一边に寄って建てられる点、桁行4間、梁行3間の総柱建物である点は小部遺跡と共通する。

一方、大型掘立柱建物の規模は万行遺跡が大きく上回る点や、建物群が廃絶した後に新たに正方形区画溝が掘られ、居館として利用され続ける点は小部遺跡とは異なる。

(iii) 小結 小部遺跡の方形区画SD-03および大型掘立柱建物SB-01との比較

小部遺跡と同時期の拠点集落との比較の結果をまとめると、下記の通りとなる。

- (a) 今回比較したいずれの遺跡でも、方形区画の一边に偏って掘立柱建物が配置される。建物の反対側は広場の様な空間として使用された可能性が高い。
- (b) 方形区画は万行遺跡以外は正方形に近い平面形の溝であり、小部遺跡の方形区画SD-03とは異なる様相を示す。
- (c) 小部遺跡の大型掘立柱建物SB-01の平面積は45.08㎡であり、万行遺跡を除くと同時期の大型掘立柱建物と遜色ない。
- (d) 四斗葺遺跡・尺度遺跡・菅原東遺跡では梁行1間で棟持柱をもつ側柱建物なのに対して、小部遺跡・小迫辻原遺跡・万行遺跡では棟持柱をもたない総柱建物で、建物の構造に差異がある。



第28図 菅原東遺跡 遺構配置図(岡田編2011より、S=1/2500)



第29図 万行遺跡 遺構配置図(善端編2003より、S=1/1000)

(6) まとめ

小部遺跡は、駅館川から分岐した小河川の黒川左岸にある標高 8 m 程の低位段丘上に形成された複合遺跡で、弥生時代終末期、古墳時代、古代といった各時期の遺構が検出された。その中でも主体となる古墳時代前期の特徴をまとめる。

(a) 古墳時代前期初頭 (Ⅱ a 期 = 3 世紀中頃) に 2 か所の突出部をもつ環濠 SD-01 と布掘溝 (柵) SD-02 に囲まれた集落が成立する。同前期前半 (Ⅱ b 期 = 3 世紀後半から末) には環濠 SD-01 ・布掘溝 SD-02 (外郭) の内部に方形区画 SD-03 (内郭) をもつ豪族居館へと変化する。方形区画 SD-03 の西辺に平行して大型掘立柱建物 SB-01 が建てられ、方形区画の東側を広場の様な空間として利用した事が推察される。集落構造の変化は、古墳時代前期初頭から前期前半にかけて、特定有力者へ権力が集中していく階層分化の状況を示している可能性がある。なお、Ⅱ b 期の遺構は、下記のとおりである。

環濠 SD-01 (外郭)	南北 120 m ・ 東西 100 m 以上で隅丸形状。南側に 2 か所の突出部あり。 (※環濠の東辺は近代の開発等で削平される)
布掘溝 SD-02 (外郭)	環濠 SD-01 に平行して掘られた布掘溝の底に、小穴が部分的に並ぶ。柵か。
竪穴建物 SH-11	東西 6.4m、南北 5.6m の方形形状。主柱穴 4 本、中央炉。四方にベッド状遺構有
土坑 SK-04	長径 0.55m、短径 0.45m の楕円形状
方形区画 SD-03 (内郭)	南北 50m、東西 37m、主軸 N5~6° E の長方形区画。布掘溝の底に小穴が連続的に並ぶ。柵か。
大型掘立柱建物 SB-01	桁行 4 間 (8.05m)、梁行 3 間 (5.6m)、平面積 45.08㎡ の総束柱建物。 方形区画 SD-03 の西辺中央に位置し、主軸は主軸 N5~6° E で SD-03 と平行する。

一方、古墳時代前期後半 (Ⅲ 期) には環濠 SD-01 ・ 方形区画 SD-03 ・ 大型掘立柱建物 SB-01 等は使用されなくなり集落が廃絶する。Ⅲ 期には台地東縁辺に方形周溝墓が少なくとも 3 基築かれており、集落廃絶後に墓域へと変化した。方形周溝墓の築造を最後に、一旦遺跡としては完全に廃絶する。

(b) 各時期の遺構は一部削平を受けるが、平面規模や配置の検討は可能で、比較的良好な状態で遺存する。また、各遺構の重複関係も明瞭で、集落の成立から廃絶までの変遷や、階層分化が進む過程を一つの遺跡内で考察できる。また、大型掘立柱建物 SB-01 は平面積 45.08㎡ と同時期の豪族居館と呼ばれる遺跡の大型建物と遜色ない。

(c) 環濠や竪穴建物等から畿内地域や吉備地域の特徴をもつ古式土師器が多数出土しており、瀬戸内海を介した交流拠点の一つであったことが伺える。

(d) 小部遺跡から直線距離で約 4 km 東にある駅館川の右岸台地上には、舶載三角縁神獣鏡 5 面が出土した前方後円墳である赤塚古墳が所在している。赤塚古墳が築造されたのは、小部遺跡で方形区画 SD-03 や大型掘立柱建物 SB-01 といった施設が築かれた時期であり、関係性が想定される。

以上のとおり、小部遺跡は古墳時代前期の拠点集落というだけでなく、古墳時代になって特定個人へ権力が集中していく状況が集落構造の変化に表れている。さらに言えば、畿内政権との関係性が想定される赤塚古墳という同時代の前方後円墳が近隣に所在している。集落と墓制の両面から階層分化が進む過程を検討することが可能であり、古墳時代前期前半における社会構造の変化や交流について考察する上で非常に重要な遺跡と言える。(弘中)

註釈

- ※ 1 SD-02 と SD-03 は柵の可能性が高く、本来であれば遺構番号を変更すべきだが、混乱を避けるために前回報告の呼称を踏襲する。竪穴建物等の他の遺構も含め、然るべき時に変更したい。
- ※ 2 久住氏の論考では、A 系統 (九州在来系)・B 系統 (近畿第 V 様式系)・C 系統 (庄内系)・D 系統 (布留系) に大別し、檀氏はさらに E 系統 (山陰系) を加えて整理している。本稿では、B・C・D 系統を畿内系としてとらえる。
- ※ 3 宇佐地域の弥生時代中期以降の集落遺跡では、台地や段丘の端部を利用して溝を弧状に巡らせる環濠集落が多数確認されている。
- ※ 4 突出部については、各報告書により「張出部」や「張り出し部」といった用語で記載されているが、ここでは混乱を避けるため突出部で統一する。

参考文献 (50 音順)

- 安部和樹・秦憲二・弘中正芳 2018 「豊前地域における集落と古墳の動態」『集落と古墳の動態 I』 pp.115-207 九州前方後円墳研究会
- 植木久 2013 「①建物の構造」『古墳時代の考古学 6』 同成社
- 甲斐忠彦・真野和夫・小柳和宏 (編) 1989 『古墳文化の世界』 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 久住猛雄 1999 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』 XIX 庄内式土器研究会
- 久住猛雄 2018 「『九州島の古式土師器』の併行関係」『集落と古墳の動態 I 追加資料』九州前方後円墳研究会
- 久住猛雄 2019 「二・三・四世紀の土器と鏡」『銅鏡から読み解く 2～4 世紀の東アジア』 勉誠出版
- 武末純一 1996 「居館」『古墳発生前後の社会像』九州古文化研究会
- 武末純一 2000 「日本古墳時代首長層居宅をめぐる二・三の問題」『韓国古代文化の変遷と交渉』
- 田中裕介 2009 「3 世紀における豊前・豊後の集落と初期の古墳」『邪馬台国時代の西部瀬戸内と近畿』香芝市二上山博物館
- 田中裕介 2010 「東九州における首長墓の変遷と性格」『九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 檀佳克 2011 「土師器の編年 ①九州」『古墳時代の考古学 1』同成社
- 長直信・小田富士雄 2006 「四 豊前の須恵器生産」『行橋市史 資料編 原始・古代』行橋市
- 長直信 2016 「豊前・豊後の官衙・集落と土器様相」『官衙・集落と土器 2』クバプロ
- 橋本博文 1996 「四斗蒔遺跡の時代と豪族居館の出現」『四斗蒔遺跡の世紀』さくら市ミュージアム
- 橋本博文 2012 「二 古墳時代の豪族居館」『講座日本の考古学 8 古墳時代 下』青木書店
- 橋本博文 2013 「④古墳時代の居住形態群」『古墳時代の考古学 6』同成社
- 橋本博文 2018 「古墳時代豪族居館研究総論」『古墳と『豪族居館』発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版

報告書等

- 江藤和幸 (編) 2010 『川部遺跡南西地区墳墓群』宇佐市教育委員会
- 岡田憲一 (編) 2011 『平城京右京三条二・三坊、菅原東遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 佐藤良二郎 1988 「II 小部遺跡 (III)」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』宇佐市教育委員会
- 佐藤良二郎 (編) 2004 『小部遺跡』宇佐市教育委員会
- 三宮昌弘 (編) 1999 『尺度遺跡 I』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 渋谷格 (編) 2015 『吉野ヶ里遺跡』佐賀県教育委員会
- 善端直 (編) 2003 『石川県万行遺跡発掘調査概報』七尾市教育委員会
- 田中裕介 (編) 1999 『小迫辻原遺跡 I』大分県教育委員会
- 高橋徹・綿貫俊一 (編) 2011 『川部・高森古墳群発掘調査報告書』大分県立歴史博物館
- 橋本博文 (編) 2000 『古墳時代における首長層の居館と奥津城の関連性に関する研究』平成 9 年度～平成 11 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) (2)) 研究成果報告書
- 藤本貴仁 (編) 2012 『宇土城跡 (西岡台) XI』宇土市教育委員会
- 真野和夫 (編) 1979 『宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報 II』大分県教育委員会
- 宮内克己 (編) 1981 『宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報 IV』大分県教育委員会
- 村上祐次・高橋透 (編) 2016 『入の沢遺跡』宮城県教育委員会
- 渡邊隆行 (編) 2011 『史跡小迫辻原遺跡 保存管理計画書』日田市教育委員会
- 綿貫俊一 (編) 2011 『岩金遺跡 発掘調査報告書』大分県立埋蔵文化財センター



写真3 小部遺跡周辺(南西から 写真奥は周防灘)



写真4 小部遺跡近景(北から)



写真5 SB-01 検出・半裁状況(西から)



写真6 4次調査時検出 SD-01 突出部



写真7 SK15 土層断面(南から)



写真8 SP85 土層断面(南から)



写真9 SP207 検出状況(西から)



写真10 SP212 検出状況(北から)



第7図6

写真11 SP90 土層断面(南から)



写真 12 SP205 土層断面 (南から)



写真 13 SP206 土層断面 (南から)



第7図6

写真 14 SP90 VII層 (掘方埋土) 壺胴部片



写真 15 SP75 検出状況 (東から)



写真 16 SB-01 支柱穴と同軸上に並ぶ SP119(調査区上空から 上が北)



写真 17 SI-01 検出状況 (北から)



写真 18 SK20 遺物出土状況 (西から)



写真 19 SI-02 完掘状況 (東から)



写真 20 SP51(SB-02) 柱痕 (東から)



写真 21 SP54 I 層 (抜取埋土) 出土
手焙形土器 覆部口縁端部



写真 22 SP54 I 層 (抜取埋土)
手焙形土器 覆部外面



写真 23 SH-10 出土鉢 (第 7 次調査出土)



写真 24 小部遺跡発見の契機となった吉備系土器
(昭和 40 年代頃出土)

報 告 書 抄 録

ふりがな	こべいせきⅡ							
書名	小部遺跡Ⅱ							
副書名	第19次調査報告書							
シリーズ名	市内遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	12							
編著者名	甲斐安寿生(編)、弘中正芳、矢部翔平							
編著機関	宇佐市教育委員会							
所在地	〒879-0492 大分県宇佐市大字上田1030番地の1							
発行年月日	2020年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡 番号					
こべいせき 小部遺跡	おおいたけんうさし 大分県宇佐市 おおあざあらか 大字荒木 453番地6、 同453番地8	211	17	33° 33' 13"	131° 20' 23"	20190329 ~ 20190712	173㎡	個人住宅及 び宅地造成 に伴う開発 行為
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
こべいせき 小部遺跡	集落、 墓	古墳時代		竪穴住居跡・掘立柱 建物跡・溝・土坑	土師器・須恵器・砥石・ 轆羽口		古墳時代前期前半の豪 族居館跡の方形区画と 大型掘立柱建物1棟等 を確認した	
要 約	<p>小部遺跡は駅館川から分岐した黒川左岸の低位段丘上に形成された遺跡である。過年度調査で南北120m、東西100m以上で、南側に2ヶ所の突出部をもつ環濠SD-01とその内側に南北50m、東西37mの方形区画SD-03が確認され、古墳時代前期前半の豪族居館跡とされる。</p> <p>今回、方形区画SD-03の西辺中央付近で、古墳時代前期前半の大型掘立柱建物SB-01等が発見された。SB-01は桁行4間(8.05m)、梁行3間(5.6m)、平面積45.08㎡の総束柱建物で、SD-03と主軸を揃える。</p> <p>今回の調査で、小部遺跡には環濠(外郭)と方形区画(内郭)の内側に大型掘立柱建物があったことが確認され、古墳時代前期の集落構造の変化に関する新たな知見を得ることが出来た。</p>							

令和2年2月21日 印刷

令和2年3月25日 発行

小部遺跡Ⅱ

第19次調査報告書

著作権所有 大分県宇佐市大字上田 1030 番地の1
発行者 宇佐市教育委員会

印刷者 明治印刷株式会社
大分県宇佐市大字長洲 607 番地

